別冊 おなご

第十七回千三忌

2001・12

20号

もくじ

ゆっくり休め　渡邊眞吾　3
姑の前掛け　高橋つか子　7
私の八月十五日　そのろ　渡辺満子　9
明日征く父　高橋ふさ　13
小魚　小原昭　14
「戦争」をよむ II　斎藤彰吾　15

私と満州国　父からの聞き書き　佐藤恵美　29
千三忌前史・その4　折居次郎・ミツ夫妻に聞く　石川純子　41
「広島で原爆に遭い父親が捜しに来た」　斎藤政一　77
あとがき　アフガンの聖母子撃つな千三忌　小原麗子　95

表紙／児玉智江
カット／大坪和子

セキさんは ネ ホントに
背の高い ガラーッとすた人でナ
見れば頑丈な
いつもニコニコてナ
いや味 言われでも
その場でおさめでナ

えっつも ごんど
じゃうぼうど燃やすて
眼めちゃめちゃどすてる人だったど モ
煙りばりでなぐ
息子征して
息子に戦死れで
泣いでるんじゃないがど
子どもにも
そう 思ったった。

〈小原昭さん談〉

高橋セキ 1966年：2月23日 没

「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って，ながい間に少しづつためた金で墓石つくってやったす。オレ死ねば，戦死した千三を思い出してくれる人もなく，忘れ去られでしまうべと思って，人通りの多い道のそばさ建でだス」と，七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

〈小原徳志著『石ころに語る母たち』株社刊より〉

ゆっくり休め

渡邊眞吾

勤めていた頃
Yと言う一つ上の同僚がいた
正義感の強い　迫力ある男だった
どこか　馬が合ったので
仕事が終わると　よく赤提灯へ行った

おでんを突っ突きながら
天下国家から芸術まで論じるのだった
酔いにつれて
必ず出てくる彼の話があった

一家で大連に住んでいた
中学校の二年生だった彼は
戦争の年の八月
友だちと遊んでいて遅くなり
家に帰ると真っ暗で誰も居ない
「随分待った　――
　危険が迫ったので　一足先に日本へ向かう」
走り書きのメモがあった

家族の後を追って
朝鮮半島を走り続けたと言う
そして　釜山港でようやく
船を待つ家族に追いついたと言う

「その時の俺の気持　分かるだろう？
わかるだろう　俺の気持
真面目に聞け　目をそらすな　!!」
酔うと繰り返し聞かされた話なので
生半可な返事をしていると
彼の怒声が飛んできた
その時の眼光に圧倒された

6 糖尿病を持っていた彼は
定年を待って死んだ
何かを　必死に
追いかけ　驀進した一生だったように思う
家族揃って過ごした日々もあったであろう
ニセアカシアの白い花が零れる大連
もう　両親とも一緒になったのだから
追いかける必要もない
ゆっくり　休め　Yよ

姑の前掛け

高橋　つか子

姑は大正三年二月十三日生まれ。今年（平成十三年）米寿を迎えた。いま、女性に多い骨の病気（骨粗しょう症）と戦っている。

私が嫁いだとき（昭和三十七年）からずっと健康で農作業をしていた。七十代に入ってから、急に腰が痛みだして歩けなくなり、ちょっと重いものを支えようと力を入れただけで肋骨にひびが入り、入院をした。そのとき、骨粗しょう症と診断された。かかりつけの医者からは、

「骨がスカスカになってもろくなっている。つまづいて転んだりすると骨を折って寝たっきりになりますよ。歩くときは充分に気をつけて・・・」

と忠告されている。

姑は、ここ二・三年前から背中が丸く体も小さくなった感じがする。家の中も杖をたよりにして歩いている。自分のことはできるだけ自分でしなくてはと、時間をかけながら身のまわりのもの（靴下、タオル、肌着）を洗濯していた。テラスにある物干し竿を使うときは、丸くなった背中を伸ばすようにしてゆっくり、ゆっくり干していた。

今年（平成十三年）のお正月に姑は、手を動かすたびに肋骨に響いて体中が痛いと言い出した。寒さも手伝って、痛みだしたのかもしれない。一人で着替えもできなくなった。トイレまで歩けなくなり、自分の部屋から一歩も出ようとしない。三度の食事もベットの上で食べる羽目になった姑は、

「骨粗しょう症は痛みがつきものだから、生きている限り痛みと仲良くしていかなければならない・・・」

と言って顔をしかめている。

それからというもの、姑の洗濯物は私が手がけた。肌着、パジャマ、靴下の中に姑特製の前掛けがあった。私の息子たちが着古したトレーニングウエアを利用している。ブルー地にポケットだけ藍色に、もう一枚はベージュ地にポケットの周りをエンヂ色で縁取りをしたしゃれているデザインだ。大きなポケットは姑の大事なものを入れておく貴重な部分である。

姑は、娘時代に縫い子をしていた、と聞いた。呉服屋から頼まれて、一重、袷羽織を縫っていた。時間をみつけては半端布で小間物を作ったりして器用だった。

姑は昭和二十一年九月に旧満州から引き揚げてきた。テレビで中国残留孤児のことが放映されると、あわせるように満州で暮らした様子を話してくれる。私には想像もつかない厳しい暮らしの話に汗を握りながら聞き入る。

開拓さなかに夫をマラリア病で失った。夫は三十九歳だった。その時姑は三十四歳だった。残された七歳の娘を上に四人の子供たちを抱えての暮らしが始まった。しかし、まもなく終戦を迎え、難民生活に入った。一緒に開拓に励んだ団員たちから離れないように必死だった。やっと港に着いたとき、病気をしている人は乗船が許されなかった。あいにく上の娘がお腹をこわして元気がなかった。検査員から

「亡くなったら海に投げる覚悟で乗って貰いたい」

と、震えのとまらないことばを受けた。一カ月も船の上の生活だから、体の弱い人は耐え難いのだった。配給される食事に間があるとき、子供たちに塩をなめさせて空腹をしのいだ。その大事な塩は、炊事当番のときのおこぼれを紙切れに包んで、しっかり姑の前掛けのポケットにあった。また、子どもたちが粗相をしたときの始末に使ったボロも入れていた。それは親子が生きるのびるために必要なものを入れてきた前掛けのポケットだった。

やせ細っていた娘も運がよく回復に向かい四人の子どもたちは、元気で内地の土を踏むことができたと、姑は手を合わせる。

いま二十歳を過ぎた三人の孫（私の子供）たちも幼いときは、姑の膨らんでいるポケットのお世話になった。遊び疲れてひと休みにオヤツをもらい、風邪で鼻がぐずついたときは素早くポケットのハンカチで拭いてもらった。孫たちにとっても懐かしい思い出のポケットにちがいない。

姑は、いま自分の体のことで精いっぱいだ。朝、静かに着替えたあと、やわらかいくの字に曲がった腰に手作りの前掛けを結んでいる。ポケットには、女性の身だしなみの一つとして、ハンカチ、ミニティッシュを入れてベッドに座っている。死線を乗り越えるときに手伝った前掛けのポケット。姑の歩いてきた道は、前掛けの一針一針に、しっかり縫い込まれている。ポケットは姑の体の一部分と同じくらい貴重なものにみえる。

寒さが緩んできたなら、姑の体の痛みもおさまってくれるだろうか。

私の八月十五日（その3）

Aさんのお話（69歳）

「大阪まで長靴を買いに」

渡辺満子

終戦の頃のことおぼえているっか

はっきりってわけではないけどおぼえているよ。玉音放送のある二・三日前頃から重大放送があると言ってだっけ。でも終戦になるということは全く解らなかった。

夏休み中だったから急に召集かけられで、黒沢尻小学校（現西小）の二階廊下で聞いた。放送終わって頭上げたら、先生泣いでるの。はっきり言ってその頃のスピー

カーも悪かったから、よく聞こえなかったのす。S先生だの担任のK先生だの泣ぐの。そしたら戦争負けたってぽつぽつ言い出した。大変なごどになったと思ったよ。

後から戦争に負けだから、あーだずよ、こーだずよと言うことは聞いたよ。アメリカ兵が来たわけでもながったとも、ニュースなんかで見て本当に戦争って、やんかと思った。

日本の場合は、一発か二発で命中させるとも、アメリカでは雨あられと降らせるんだっけもの。心の中で、これでは負けると思った。だってあの雨あられと降らせる弾の数すごいんだもの。映画館でニュース見て、これでは負けるんだなって思った。でも口には出さなかったよ。負けるなんて言うと、負けでからでも言えば、スパイだのって言われる。そのように言われだぐなかったもの。

女学校の受験に行ったとき、「アッツ島玉砕！」ってあったのよ。その時先生が黒板に「アッツ島玉砕！」って書いたんだっけ。玉砕なんて大変なもんだと思ったよ。その年に負けたの。

私は受験に失敗して小学校に戻って高等科に入ったの。勿論落第したのす。だってクラスから六人ぐらいだよ。優等生だったBちゃんだって落ちたんだよ。

口頭試問で何を聞かれたかおぼえてる？

全然、おぼえてない。それわね内申書見てこの人は脈あるから、そういう人には聞いたと思う。

終戦になるまでは校庭に穴掘って南瓜植えだり、常盤台に行ってそば植えだよ。勉強は少しだけした。担任の先生は子守唄をよく歌わせだった。戦時中だからなんだり歌わせられないからだったと思う。変わった物語風の子守唄だった。

終戦の前日、私の家では二子の山に疎開したけど・・・

しなかった。ただ裏のキュウリ畑さ屋根かけてそごさ逃げるようにしたった。

終戦になる二日前に父が仕事で仙台に行ってなかなか帰ってこなかったの。二・三日経ってから真っ黒になって帰ってきたった。すすけで。途中まで歩いて汽車に乗ってきたって。仙台からそったにかかる筈ないんだもの。

帰ってこないから焼け死んだべかと思った。仙台空襲もあったときだったから。

父はその頃、大曲にある鉄工場に行って働いでいだった。今はなぐなり住宅が建っているよ。父は五十歳ぐらいだったべが。ただ家業ばかりやっていられなかったのよ。戦地には勿論行けない年だったし、父は日本人でなかったから。

家業は古物屋だったとも、鉄屑なんかはみんな国で買いあげるから、個人ではやれなくなっていた。母は製板工場に行って働いていた。その後縄屋に行っていたよ。農家の人以外はどごさが行って働かねばならなかった。

出征兵士を見送りに行ったか？

諏訪神社に行って見送ったことはなかった。母の兄が出征するとき実家に行ったよ。兄は四十歳ぐらいだったと思う。戦病死したの。体弱かったから。でも遺族年金をもらえるがらえがったようだっけ。子供六人もおいて征ったんだよ。その年金で子供たちを育てたと思う。小学校終わると、みんなすぐ、奉公に行かせられるんだっけ。

米の話すれば、「米、ゆずってけろ」と言えば、兄がいないもんだがら、「お前さなどやる米など無え」って言われだのよ。それで私のおばあさんは遠くまで出かけて行って米買ってきたの。その時私も一緒に行って、なんぼでもねえ米っこ背負わされた記憶ある。終戦後のことだよ。

母は、兄がいればこったなことながったって何回も言うんだっけ。母の兄は人が良くて、私の父にも「一郎、お前さあそごの畑けるがら家建でろ」なんていう人だったもの。その兄が死んだら周りは冷たくなってしまったの。いずれどごでも大変だったのす。

浜まで魚買いさ行ったよ。本石町に更正市場があって、そこで売ったりしたの。有る着物もなぐなってしまって。こんなことして生かされてきた。それでも身寄りのある人は良かったのす。疎開者で身寄りのない人は、栄養失調で亡くなったよ。

私なんかなんでも働いたよ。田んぼさ行ってせり採ったり、山さ行ってノビルコ採ったり、日曜日はそんたなことばかりしてた。田にしを取ってきて煮て食べたり、

ただ食べることだけに一心だった。勉強なんてひとっつもしないのす。

この、ころ、父はある人から、「東京さ行って闇の物仕入れでこないか」って言われだんだっけ。そのあとに、父の友達、って言っても日本人ではないよ。大阪に住んでいるその友達から「長靴作っているから、買いさ来ないか」って言われ、私も父と一緒に大阪に行ったよ。終戦後一年ぐらい経った頃だった。

その時だ、なんて言う名の川だか忘れたけど、その川の辺りさ鉄屑や色んな物いっぱい投げでるの。父は古物屋だったからそれ見て、「ほんとに、戦時中だったら高がった筈だったのになあ」って言ってだっけ。

アメリカ兵は大阪ではじめて見た。大阪まで汽車で行ったの。丸々一日がかりだった。東京まで行って、そこから乗りかえでなハ。立ちっぱなしだったよ。その時、前の方に立っていた紳士が騒ぐんだっけ。そしたら立派な背広着た人のポケットが切られて、財布盗まれだって言うの。

こんたな時代だった。ほんとに混乱期だったなハ。

父は仕入れできた長靴を売って歩いだっけ。私はしなかったとも。私は学校に行く前に二子のがんざ坂まで行って、リヤカーに積んできた野菜を買って自転車に乗せで来たもんだった。

あの頃は、本当になんでもやった。それを乗りこえたから、今、こうしてたくましくなったんだと思う。

なにしろ食べるものだけにお金かかった。着るものはある物を利用したの。父はおしゃれ男だったの。だから背広もいっぱいあったの。その一枚を私用に仕立屋にたのんでなおしてもらって、その一枚をみんなに貸して着たものだった。

明日征く父 ―― 高橋ふさ

ものもらひ出来たるわれに添ひ寝して
明日征く父が冷やしてくれき

四年前命もらひて今日あるに　手を合せつつ飛行機にをり
わが祖父も父も夫もこの海を　船にて渡り戦ひにこし
一様に雪積むごとき雲海の　浄き真下に戦ひありき
上海の文字見ゆるたび懐しき　湧きくる耳馴れし土地
父撮りし市場に来れば　計り売りする声弾み足をとどむる
曳きづりし足を支へて老人が　病院跡地と答へてくれき
衛生兵の父をりし病院小学校となりて　花咲く合歓の巨木は
佛粗界と手紙にありしフランスの　居留地しづまる古き建物
上海を語り語れる父思ひ　六十年を経てこの地に立てる

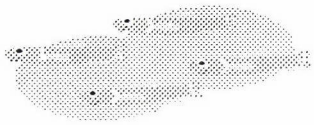
小魚

小原　昭

昭和十二年の夏
「昭ちゃん　今　兵隊さんが
お部屋で眠っているから
裏の川から魚取って来て」と
母の声

笊を二個持って
臑を捲り
川に入る

無数の小魚が



私の足に吸い付く
そこを静かに　静かに
掬う
小魚は　六、七センチ
大きいのは十センチ位
真っ黒に集まり
数分間のうちに
笊に八分目掬った

母は早速
小魚の腸を取り
天麩羅にした

兵隊さんは
この免渡河に駐在する
小松原部隊の方だった

母とは時折
中国部落街で買物の
行き帰り

顔馴染みになる
「おばさんの所に行って
畳の上で休みたいなあ・・・」
と言ったそうだ

兵隊さんは日曜日に来たのだ
久しぶりに畳の上に座り
お茶碗に
ご飯　味噌汁　天麩羅
家庭の味を味わったと
喜んで帰隊して行った

ノモンハン事件が勃発し
駐在していた
小松原部隊は
戦地に向かい
全滅したと聞いた

「戦争」を読む・Ⅱ

斎藤彰吾

私を見ていると

照井時子

私を見ていると
母のようだと
兄弟が言うのです

深く裂けたあかぎれが
夏になっても癒えない手で
幼い私の背中をさする
ひりひりとした感触は／今になって

母の心そのものでなかったのかと
酒を飲めば
日本刀をふりかざす父から
逃げまどう日々に
「死にたい」と口ばしる
私の全身に伝う母の深い悲しみを
知らず知らず刻んでしまったのか
やがて／出ていった父の元に
通う母の
その手のひと包みの洗濯物に
色あせた男と女の絆について／思うのです

万有引力とは／孤独の引き合う力だと
言った詩人の言葉を思い出します
手元に残された／一枚の写真の中で
陽に向かって眩しそうに
顔をしかめる母が
私に焼きついたまま
歳月が茜色に染める今
人間の寂しさを写す私と
私の鏡に映るひとりの男を見ています

私を見ていると
死んだ母のようだと
兄弟が言うのです

◇

酒乱になり「日本刀をふりかざす父」が出てくる。明治以来の三つの戦争が家庭に影を落とす。富国強兵によるこうした男は、先の大戦後暫くいたが、今は消えた筈。それにしても小泉首相の靖国参拝や歴史教科書が国民にナショナリズムを引き出した。これがコワイ。

育ててくれた母の行動を、作者の「私」との関連で表現。兄弟から母と似ていると言われ、自分を改めて見つめ女の切ない情念をえぐった。

北上詩の会々誌〈ベン・ベ・ロコ〉第百四十号から掲出。花巻市在住。

'01・8・25

戦死

天野忠

どういう潮流のかげんでか知らないが
南の方の海の底では
軍艦からおちた人が
今でも　立ったままの姿で
ふうわり　ふうわり　浮いているそうだ
さかなどもがいっち先　眼鼻を喰いちらし
それから腹を喰いちらし
ももから足を喰いちらし
だんだんそのへんのさかなどもが

よく肥ってイキが良くなる頃には
ふうわり　ふうわり　浮いていた人は
すっかり　肉ぐるみはがれて
骸骨になって
それでも成仏できないのか
いまでも
立ったまま
ふうわり　ふうわり　ふうわり
南の海の底で宙に浮いているそうである。

◇

南太平洋の海中に沈んだ戦死者を、寓話の人形劇のようにえがき、第二次世界大戦を問いかける。モチーフ（動機）は、世間の風聞や噂話だったろう。

「立ったままの姿で」海に浮いている死者の肉を、魚どもが目鼻から足まで喰い肥えてゆく。ホトケにもなれない骸骨が、今も海の底で宙ぶらりんのまま、「ふうわり」浮いているとの話。

「アアウラメシヤ、恨メシヤ」。この戦死者は、現代の幽霊で妙な存在感を持つ。

「おれたちは、」そう簡単にホトケなんかになるもんか。戦いに死んだ者は死んだ者なりの礼節があるぞよ。」そんな抗議の声が、この詩から聴えてくる。また魚どもは、死の商人だと言ったら余りにも、うがち過ぎか。

『日本名詩集成』学燈社・（一九九六年刊）より。明治四二（一九〇九）～平成五（一九九三）。京都府出身。詩集『単純な生活』『その他大勢の通行人』等。

’01・9・1

終戦

高村光太郎

すっかりきれいにアトリエが焼けて、
私は奥州花巻に来た。
そこであのラジオをきいた。
私は端座してふるえていた。
日本はついに赤裸となり、
人心は落ちて底をついた。
占領軍に飢餓を救われ、

わずかに亡滅を免れている。
その時天皇はみずから進んで、
われ現人神にあらずと説かれた。
日を重ねるに従って、
私の眼からは梁が取れ、
いつまにか六十年の重荷は消えた。
再びおじいさんも父も母も
遠い涅槃の座にかえり、
私は大きく息をついた。
不思議なほどの脱却のあとに
ただ人たるの愛がある。
雨過天青の青磁色が
愕然とした心ににおい、
いま悠然たる無一物に
私は荒涼の美を満喫する。

◇

昭和二十年八月十五日を迎えて、「私は大きく息をついた」とあるように、長い「重荷」から解き放たれた実感がせまる。「暗愚小傳」と題された自伝風の連詩二十編の中の一つ。初め雑誌「展望」（昭和22・7月号）に発表され、のち詩集『典型』（昭和25年刊）に収められた。「暗愚小傳」は、〈家〉〈転調〉など六つの小節に分かれている。掲出の「終戦」は、その五小節目の小題〈二律背反〉に「協力会議」「真珠湾の日」「ロマン・ロラン」「暗愚」に続いて載る。そして、終り六小節の〈炉邊〉が「報告（智恵子）」「山林」の二編で結ぶ。

この「終戦」を含む「暗愚小傳」は、詩集『典型』の中核をなし戦争協力詩を書いた自己の精神史を摘発追求したもので、戦争を「繰り返すことのないための一つの懺悔の詩として残さるべきものと思う」と草野心平がやや遠慮がちに角川文庫版の詩集解説で記している。なお原詩の旧かなを新かなに修正したことを付記。

'01・9・8

高村光太郎

宮（みや）　静（しず）枝（え）

世に罪のない旗があるだろうか
帝国の命運をさかしらに流され
たくらみにいたぶられ
この国の歴史は敗れた
ゆすればこぼれる感傷である

水風呂にはいるような
つつしんだ明かしくらし
　いま　私の彫刻させないことは
　日本の損失ではないかと　心に語る
自分を語り明かすことなく
原初からの因果律を思う

ひと夜さ吹雪は
数万の軍靴の音となって心をいたぶる
男は泣くものではない
許されぬ涙を立法としながら
けもののように自分の傷をたしかめ
心の責めを語り明かさず
山荘を残して人は逝った

◇

新刊の詩画集『さっちゃんは戦争を知らない』（盛岡市・熊谷印刷出版部）から。書名となったさっちゃんは作者の妹。幼少時に四歳で亡くなった。九十一歳になった作者は、今でもこの妹が忘れられず作品にし、詩画集の表題とした。

さて掲出の「高村光太郎」。初行でいきなり「世に罪のない旗がある」か、と問う。ストレートな強い意志表示。世界中の国々の国旗には、戦争や紛争の罪悪が秘められているのですよ、作者が暗示的に答える。

だから大戦下の光太郎が、日本帝国の「たくらみにいたぶられ」て作った「進軍歌はあまたの若者を戦場に送った／思わざりしよ／愛国と戦争の／分かちがたき背反を」（詩画集所収のもう一つの「高村光太郎」より）と歌い、犯したことに思いを至らしてほしいと作者は訴える。

回避できなかった戦争責任を是認しながら、人間的な深い「かなしみ」を包みこみ造型した。二節の「水風呂」は、償いのため住んだ花巻市太田の山小屋生活を直喩にしたもの。凝縮された硬質の詩句が、愛と尊厳で光太郎を色どる。

’01・9・15

薫風のごとく

高村光太郎

われらは既に彼らの戦術を熟知す。
彼らの戦術に他奇あるなし。
ただ海を蔽ひ空を蔽ふ鉄量と科学とに
彼らの富と蛮力とありて
暫くわれらの国土の表面を蹂躙するのみ。
彼らが蹂躙せりとなすもの
実は多くわれらが余贅剰疣の類にして
われら民族の実体は卻ってその皮下にあり、
われらが祖神むしろ彼らの手をかりて
われらが汚毒を焼却し給ふならざらんや。
日本国土あまねく灰燼の帰し
行政の機構ことごとく停頓するが如き時、
われら民族の自性勃々として焦土にめざめ、
われらが祖先の息吹薫風の如く全土に満ちん。
今や一億の老若男女すでに組織せられ
御一人をめぐりて人垣つくれり。
来るものよ、徹底して来たれ。
われら亦神性に徹底して悉く之を破らん。

◇

『高村光太郎全集』第三巻より。この詩の背景にふれる。研究家北川太一氏の解説によると、昭和二十年六月二十五日の作で、七月一日発行の雑誌「主婦之友」（29巻7号）に発表。戦災で五月花巻に疎開。肺炎となり六月十八日から二十四日まで鉛温泉で療養。宮沢家に戻り執筆したもの。

光太郎戦争詩の最後に属する作品である。開戦時から敗戦時までの百十余編を読んだが、その徹底した精神力に凄絶さを感じた。相次ぐ玉砕があってもひるむことがない。すでに軍部の指導をこえたところにある。その積

極さ思い切った態度。

敗戦末期の極まりに立ちながら、勝利を信じ自らを国民を、鼓舞する詩を書き継いだ支えとは何だったろうか。

掲出詩は、彼らに海空を制圧され国土も踏みにじられたが、それは表面だけのことだよ。皮下の内部には、祖先の魂がみちのくの薫風のように息吹き、一億の人垣（精神共同体）が天皇を守っている。だから「神性」のわれらが必ず彼らを破る、と。本土決戦の玉砕を想定したようにも見えるがどうでしょう。

’01・9・22

輸送船

井上靖

初冬の海峡におそい月が出た。刃のような三角波がくろい海面を埋め、くらげの息をひそめた眼が、時折、波間から月をうかがっていた。その中を燈下管制した輸送船は動くともなく動いて行った。満載した兵隊の一人をも零すまいとするかのように・・・。

いったい、いつ、どこへ上陸するのか・・・誰一人知っている者はいなかった。内地の最後の灯だというどこかの燈台を右舷はるかに見送ってしまうと、兵隊たちは申し合わせたように船底に降りて、愕くほど深い睡りに落ちた。潮流のそこここに無数の花が開き、祝祭にも似た異様な明るさが、この不思議な船に立てこめ始めたのは、確かにその頃からだった。

◇

井上氏は、『天平の甍』『孔子』などで知られる作家だが詩人でもあった。物語性のある透明な抒情が、結晶度の高い散文詩を形成した。

兵士を満載した輸送船が明かりを暗くして「くろい」海を行く前半。「刃のような三角波」の間から、くらげの眼が「月をうかがって」いる情景は、どこか不吉なものを走らせる。後半、兵たちが船底で睡りに落ちた頃、潮流に花が咲き異様な明るさが「船に立てこめた」と。

この輸送船は、まもなく撃沈されたのではないか。非常なものの予兆が感じられる。先きに紹介した天野忠の「戦死」を思い出してほしい。併読することで読みの経験がふくらんでくる。

『井上靖全詩集』（昭和58）所収の『北国』より。『北国』は、最初の詩集で昭和三十三年に刊行された。小説『闘牛』で芥川賞を受賞した八年目のこと。その主要作は、戦後の三年間〈戦争〉を直接間接のモチーフにしたと、詩人宮崎健三が解説（『全詩集』）でふれている。

兵役は、日中戦争の十二年に中国北部に駐屯し翌年病気で内地に送還され除隊したとあるから、一年間ぐらいのようだ。その後、関西の詩人たちと交わり「小説を書くまでの約二十年間、詩のために苦労した」と『北国』のあとがきで記している。

日本文学界の巨きな存在だった。日本現代詩歌文学館の名誉館長としての業績がいつまでも記憶にあたらしい。

'01・9・29

喪心のうた

鮎川信夫

1

おれが古いいくさの歌をうたったら
みんな日暮れの桟橋に集まってくれ
いまはなつかしい硝煙とそのにおいのなかに
あたらしい屍体の雨をふらすから

おれが古いいくさの歌うたったら
みんないっせいに銃剣の襖を立ててくれ
悲しいかな　海のなかに海をつくり
魂は死んで二度と生まれてこないから

おれが古いいくさの歌うたったら
みんな夜明けの桟橋から散ってくれ
うたいながら破壊する若い勇士たちが
恋をすて故郷をすて他人の国へゆくのだから

2

おれのこと憶えているなら
毛深い夢の絨毯に戻ってきてくれ
憎しみをかきたてる火掻棒で
もういちどハーブの筋をかき鳴らすから
（以下二連略）

◇

『鮎川信夫自撰詩集1937～1970』より。鮎川は、一兵卒としての戦争体験を内部に抱え込み、〈荒地〉グループの理論的な担い手となり日本の戦後詩をかがやかしく開いた。

戦後社会を絶望も希望もない曠野に見立て、「重たい刑罰の」砲車をおしながら／血の河をわたっていった兵士たちよ」ぼくには勝利も敗北も国境もない「悲しみによごれた夕陽をすてにいこう」と呼びかけ、倫理の強い言語を美しく屹立させた（「兵士の歌」）。

掲出の「喪心のうた」は、右の「兵士の歌」に対する返歌。身を張った戦没兵士から生者へ送る四行三連のうたが鮮烈だ。人々が離合集散する桟橋での、別ればかりではない連帯への志向が心に届く。

「彼の目が峻厳なのは、死者の目で生を告発」したからだと終生の仲間、三好豊一郎が解題している。

’01・10・6

じゃがいもの丘

渡邊眞吾

雲が大きく小さく動く
茄子の花に似た
白や紫の花をつけたいも畑がうねり
長い夏の一日にも／夕暮れがやってくる

秋立つ日／しばらく会っていない友人から
砂土を少しこぼしながら／じゃがいもの宅配が届く

「戦争　戦後の同時代を生きた友へ」
と　添え書きを付して／いもを食って生きのびたのだから／格別の愛着をこめて

作ることを忘れなかったと言う
粒揃いのものでは無かったが
開けてみて胸が詰まった

不意に鼻孔をくすぐる匂いがある
小学校が国民学校に変わった頃
味噌汁に残った具を／ご飯に乗せるだけの
簡単なものだったが
自分で弁当を作って登校した
授業中／教室の薪ストーブの上でいい匂いがして
腹の虫が鳴くのだった
特にじゃがいもの匂いは食欲をそそった
昼食時には菜飯に汁が滲みていた

煮しめたいもを頬ばっていると
喘ぎながら翔ける地球の影がよぎった
二十一世紀
あなたの町　私の村の
じゃがいもの丘に
咲いているだろうか

あわい　紫の花

◇

「同時代を生きた友へ」と手紙を添えて届いた、じゃがいもの宅配便。戦争末期から敗戦後にかけ、いもは大切な代用食だった。湯気立ての皮をむき塩をかけて、好く食べたものだ。銃後の少年少女たちの生活風景だ。

このことを胸に秘めて、しっかりと栽培を続けてきた送り主の晴れやかな心情。それに応えたのが掲出詩で、終連、畑の「あわい紫の花」へ、いつまでも平和であるようにと願いを託す。反戦のシンボルとなったじゃがいもよ。

初出。〈別冊おなご〉第19号。新刊の詩集『奥の相聞』より。

’01・10・13

アメリカ同時多発テロ・詠唱集

いまわしき空の道見ゆ震撼と米中枢同時多発テロ　遠藤タカ子

この頃は戦争さながらテロ事件平和無くする時代になるや　八重樫ヨネ

強気にビンラディンは理屈つけ聖なる道を進むと言ふも　高橋　廣治

簡単に人を傷つけ殺し合うニュースに心傷む日つづく　池田　眸

水平に近づきゆくクジラかと長閑（のどか）に見せし航空機テロ

航空機消えて巨大ビル炎上す　青灰色のその断末魔

ビルに向かう航空機の道　それぞれの思い絶して音をのむ惨

芋掘れる畦にも浮かぶ白抜きの文字の禍々（まがまが）しきテロの惨　三浦　忠雄

◇

九月十一日に起きた米中枢同時多発テロは、「事実ハ小説ヨリ奇ナリ」のことわざをまざまざと想いおこさせ、大きなかなしみと共に様々なことが考えさせられた。一番先に浮かんだのは唐突ながら、一九四一年十二月八日、パールハーバーを奇襲した帝国陸海軍のこと。だが、この開戦は長くなるので、さておく。

十月七日、歌誌〈手〉10月号（短歌「手」の会・代表佐藤怡當）を頂いた。やはり短歌は反応が早い。テロを題材にした歌が、五人から八首寄せられていた。また朝日新聞（10月8日付）の歌壇では、選者四人が同様の歌を三首から六首を選び、その一人近藤芳美は、「おびただしい」作品が寄せられた」と評している。

掲歌遠藤作の「いまわしき空の道」とは、在ってはな

らないことが米国で起きたことへの、日本人としての反省か。八重樫作は戦争と平和への不安感を伝え、高橋作はテロ指導者を疑問符でくくる。池田作は人類愛で包んだ。三浦は題詠を含む連作で新聞を見て書いたと自注。身に受けた衝撃の強さを映像的にとらえ、テレビの画面以上の再発見をうながす。朝日歌壇の「火傷せし犬の履きたる赤い靴瓦礫のけむる山を降り来る」（座間市・小飼美 智子）は、画像からの発見。

’01・10・20

九軍神

草津信男

「偉動輝く特別攻撃隊／布哇真珠湾を強襲」
「盡忠古今に絶す／軍神九柱※」

特殊潜航艇は五隻／一隻二人乗りの筈
それなら一人足りない／小学生の僕と
女学生の姉と／新聞をかこんで
額を寄せあったが／どうしてもわからない
姉の提案で／一人乗りが一隻
あったことにしておいた

戦争が終わって
捕虜第一号／十人目の人が帰って来た
（軍神からはずされていたが
生きていてくれてよかった）
今では文庫本でも見られる
出撃前／母艦で撮った特別攻撃隊員十名の記念写真

少年の日の僕の直感は／正しかった
正しくなかったのは
どこまでも真実を追究しなかったことだ

九軍神と発表することで
大本営がいかにウソをつくか
特別攻撃隊の「戦果」を讃えることで
これから国民に／自殺攻撃※※を強いることを
開戦劈頭

権力自らあきらかにしていたのに

姉が逝ってしまって五十年余
やっと気がついた

※　一九四二年三月七日付東京朝日新聞一面見出し。
※※　牛島秀彦著『九軍神は語らず』（光人社ＮＦ文庫）
六ページ「特別攻撃を米軍は自殺攻撃と呼んだ」云々。

◇

真珠湾開戦の翌年三月のこと。「九軍神」が載る新聞を前に、姉と弟（作者）の二人が「あとの一人はどうしたの？」「おかしいね」と疑惑を語り合う。やがて戦後その事実が分る。中の一隻が故障しオアフ島の海岸に打ち上げられ、意識不明になった一人が第一号の捕虜となったのだった。

大本営は、この真相を知らせなかったばかりではなく、攻撃で何一つ「戦果」をあげない九人の海兵を「軍神」に仕立て、国民にあおりの報道をしたのである。権力の構造を見破り、真実をつかむ力を持つことだと自ら戒め、私らに教える。詩集『虎の尾』から。多くの戦争詩がある。一九三〇年生まれ。京都市在住。

’01・10・27

夏のえぐり

木島始

十七歳という年なら　夢みるいがい
いまという時は　ふつう　ただ
目の前だけが　回転してる筈だのに
光りで　全身火傷し　完全無言のまま
死んでいく友を看病しだした頃
ぼくは　目の前にないもの　かたちの奥のもの
神と言いならわしたもの　その徹底したしぶとさを
感じだしていたかもしれない　異常きわまるその夏に

そして　神と崇めさせられていた
ひとの放送を始めて聞かされて
ぼくは　神の無残さに打ちひしがれながら
それでいて畏れを湧き立たせだしていた
ぼくの内部にぼくたちを越えるものが

確実に有無を言わせず貫流するようだ　と
それは　広島市外でのことだった
生きのこった友の呼びかけに　すなおに
ぼくは　狂乱無心の踊りにふけった
すくなくも数分は　そして

◇

作者は、旧制第六高校（岡山県）二年在学中、広島に投下された原爆の恐怖とすさまじさを目の当たりで体験した。初期詩の前半を引用する。「手にふれるものは／みな熱い／ねじれまがった／真鍮の／ボタンと／帽子の／校章だけが／これだ／これが彼の屍骸だと」（「起点」）

「夏のえぐり」では、ケロイドで焼けただれた友人を看病。死を見送るなかで、敗戦を告げる天皇のラジオ放送を聞かされる。あらひと神といわれたひとの「無残な」正体と「畏れ」を感取し、それがなお「ぼくたちを越え」て「貫流するようだと」体感する。

二連目の終り二行。戦いが終わった解放感で友と肩組み合いストームでもやったのだろう。「狂乱無心の踊りにふけった／すくなくとも数分は」に続き、「そして」の接続詞止めでこの詩は終る。この以降をどう読むか。前に戻って繰り返し読むほかない。

ゲンバクに天皇制をたたみこみ、それを日本人の「夏のえぐり」とした作品は、他に例のない独自さで、わたしをぎょっとさせた。日本列島は、えぐられた形で戦後の民主々義がスタートしたことの根を改めて考えさせる。このぐらつきが、米国のアフガン報復攻撃同調と関係していないか。雑誌『新日本文学』七、八月号の特集「詩による現代史の試み」より掲出した。

’01・11・3

『週刊きたかみ』「詩歌春秋」より

中国新聞

私と満州国

―父からの聞き書き―

佐藤　恵美

一　父の渡満

父は小学校を卒業して以来、真城村役場に勤めていたが、昭和十三（一九三八）年満州国政府要員として昭和十四（一九三九）年五月吉林省吉林公署に赴任していた。私を身ごもっている母を祖父母に託して、単身の赴任だった。

満州国の建国は昭和七年（一九三二年）三月、清朝最後の皇帝、薄儀（宣統帝）を擁して、「王道楽土を実現」と宣言して実現していた。

今年の十一月三日、私はたまたま真城の実家に父を訪ねた。

「恵美さん、今日はあんたの誕生日だな。実際は十一月二日に生まれたんだが、おじいさんが三日として届けたんだよね。」

父が満州に渡った半年後の昭和十四年（一九三九年）十一月三日に、私は生まれたことになっている。

その日は「明治節」明治天皇の誕生を記念するという祝日になっていた。戦後、十一月三日は「文化

の日」と名前が改められている、

―昭和十五（一九四〇）年、わたしが一歳の時、お父さんが満州から迎えに来て、お母さんと一緒に満州の吉林省扶余県（現在松原市）に行ったのね。

「後に残ったおじいさんはそうとう寂しかっただろうね。可愛がっていた初孫のあんたはいなくなるし、おれたち息子三人も皆満州に行ってしまっていたからね。」

満州に渡ったのは父だけではなかった。父の二人の弟、正二（叔父）は満州国の鉄道員として、下の弟の正三（叔父）も満蒙開拓青少年義勇軍に参加していた。

「その頃、真城の家ではおじいさんは大変な詐欺に遭っていた。長年お金を貯めてやっと手に入れた土地を登記をしないうちによそに売られてしまったんだ。それにも懲りずに、さらに水沢公園の料理屋だった建物を買い取って、新しく家を建て替えたりしたものだから、借金がたくさんあった。お母さんがおれのところに嫁いできて間もなく、庄屋のおばあさんがお母さんを呼んで、『友江さん、大変などごさ嫁ごさきたな。たいした借金があるんだっつ。いまのうちに、荷物をまとめて実家さ帰ったほうがいい』と言ったそうだ。お母さんはすごくおどろいたそうだ。」

父が満州へ行く気になった動機はそんなところにもあったようだ。

「満州では給料が高かったから家にずいぶん送金した。

真城の役場にいるときの給料は二十八円くらいだったのに、満州では百二十円くらいだった。そんな大金でも、それなりの付き合いをすれば使ってしまう。

あるときお母さんに言われた。

『私たちは借金を還すためにきたんだから、節約して早く還してしまおう』

と。

一年で二千円くらい家に送った。おじいさんは神棚にあげて喜んだそうだ。借金は全部還したそうだ。白山のお母さんの実家にも送ったこともある。毎月五十円貯金して五十円から百円ぐらいは郵便為替で送った。

『栄之助（祖父）さん家（え）さ行くどいつも温かいお茶っこ飲ませられる』
とみんなに羨ましがられたそうだ、おじいさんうんと自慢していたんだな。」

二　吉林省扶余県での生活

ーところでお父さんが最初に赴任した吉林市から扶余県公署に転勤したのは、地理的には不便な田舎ではあるが、立派な公舎があるから、と言っていたけど、どんな家だったの。

「風呂、便所、台所に、八畳と六畳の部屋、それに真ん中の四畳半の部屋にはペチカがあった。

扶余ではあんたの妹の秋美がうまれた。よちよち歩きの秋美がみそ汁の鍋を運んできたお母さんとぶつかり、火傷をしたことがあった。

写真ー扶余時代の家族

洋が生まれたとき、男の子と分かったら、お母さんはびっくりして気を失ってしまった。産婆さんに医者を呼ぶように言われた。でも呼ぶ前に顔色がよくなった。前に同じようにして産婦が亡くなった例があったので慌てたらしい。

おじいさんに来てもらったのは扶余にいた頃だ。おばあさんも洋が生まれたときに来た。」

ーおばあさんが来たことは私も覚えている。おばあさんが秋美をおんぶして私の手を引いて外を歩いたら、現地の人が秋美を可愛いと見に寄ってきんだって。

『おばあさん、触らせちゃだめ、満人はきたないからね』

とか、便所には蠅が多いので

『おばあさん待ってて下さいねアブがこわいからね』

とか私が言ったんだって。

おばあさんはよく満州のことを覚えていていて話してくれた。

「満人はすごく貧しかった。日本人は消費組合というのをつくっていて、そこでいろいろ買い物をする。

私が役所から帰ると、あんたと秋美を散歩に連れ出して、よくソーダ水を飲んだものだった。
お母さんも千葉さんや中田さんのおばちゃん達と友達もできていた。」

ーそういえば、ワンピースを着た若いお母さんがきれいなおばちゃん達と写した写真があるね。
治安はどうだったの？
「日本の満州国統治に不満を持つ満人とは、撃ち合いのようなこともあったし、夜警をしなければならないくらいだったから、治安はよかったとはいえない。
あるとき、捕えた匪賊の首を県公署の庭で落とすから、日本人で希望するものは集まれと言われた。おれも行ってみようと思った。
その時、川島新一という庶務課長に呼ばれたんだ。
『無理してやることじゃない。あんたがその匪賊にひどい目に遭ったというなら、処刑に手を貸しても自己防衛といえるかもしれないが、何もされたわけじゃない。やめなさい。』
と言われた。
後ろ手にしばられたその匪賊は、日本人をうんと罵っていた。その後広場で首を切られた。
後で分かったのだが、おれを止めてくれた人は熊本県出身でお坊さんだった。いつか熊本に行ったとき会いたいと思って連絡をしたが、不便なところだから来なくともいいと言われ、会えなかった。
役所では、一応『長』の立場は満人、『副』は日本人だった。しかし、そんなことは名目だけで、実際に権限を持っているのは日本人の方だったので、日本人を羨ましがっていた。もちろん、恨んでいる人も多かったさ。」

私たちの生活が落ち着くと、父は祖父も祖母もそれぞれ内地まで行って送り迎えをして満州国を見物させたりしたという。離れ離れの弟達とも良く連絡をとりあっていたそうだ。
父は将来は満州に祖父母を呼び寄せて永住するつもりだったらしい。
昭和二十一年（一九四六年）九月、私たちが命からがら引き揚げて来たとき、祖父は中風で倒れて、ほとんど記憶がなくなっていた。
「うるさいがぎだちだ、どこのわらしゃだだ」
などと、一緒に炬燵に当ったりしていると睨まれたことを覚えている。

ウランバートルに抑留されている父の復員するのを待つたのでしょうが、父の無事な姿を見ないで亡くなった。私が二年生の時だった。

祖父の甥にあたる人が遺体を抱き上げてお棺に入れるのを見て、気持悪くないのかな、親切ないい人だな、お父さん早く帰ってくればいいのに、と子供心に思った。

三　全員無事帰る

「おじいさんはおれが帰る二ヶ月前に亡くなった。帰って来たとき、おばあさんから部落の人たちに随分世話になったから、挨拶をしてこいと言われた。

まず庄屋に行く、

『港さんはいがった、おらえのとうちゃんは死んだ。』

と泣かれた。次は馬車引き屋、やっぱり旦那殿は戦死していた。そこでも泣かれた。次の幸左衛門さんのところでは、息子が名誉の戦死だ。ここでも泣かれた。もう辛くて、回るのを途中で止めてしまった。

我が家では全員無事に帰ったな。

何人だ？

お母さんが子どもを四人何とか無事に連れて帰った。正二のところでは房子（叔母）が二人連れて帰ったし、正三のところでもあき（叔母）が一人連れて引揚げてきた。

我々兄弟もみんなそれぞれ抑留されていたのが、最初はおれ、そして正三、最後に正二という順でみんな帰って来たな。」

ーあき叔母ちゃんの正子ちゃん（長女）は引揚げて来てすぐに亡くなったのよ。向こうで亡くなったらおばちゃんは帰国できなかったかもしれない。

そういえば、おばあさんは毎日毎日太鼓を叩いて南無妙法蓮華経を唱えていた。それも通じたのかもしれないね。

二人の叔母ちゃんと子供たち、みんな真城の家に集まって、お父さん達の帰りを待ったのよ。お父さん達の写真の上に五円玉をぶらさげて、表とか裏で、生きているとか死んだとか、占いみたいなことをして案じていた。

今思うと、夫の安否を思う妻達はやりきれなかっただろうね。

四　引揚げまでの生活

ーところで、お父さんに召集令状、『赤紙』が来たとき、お母さんとどんな話をしたの？

私はいつも思っていたが、二十八歳という若さで四人の子供を生み育てることに明け暮れていて、お父さんだけを頼りにしてきたお母さんは、お父さんが軍隊に召集されて一人になってどんな思いだったかしら。

「おれはお母さんには、内地に帰ってもいいし、そのまま残ってもいい、と言っていた。でもお母さんは残ると言った。

四月には洋美が生まれていて、おれは六月に召集を受けた。

知人に妻子のことを頼んだ。

後から聞くと、扶余県の同僚だった千葉さんが来てくれて、ひとまず一緒に扶余県に行き、そこから引揚げようと誘ってくれたらしい。お母さんは断ったそうだ。それでよかった。扶余までは遠い、奥地に行けばまた出てくるのは大変だろうから。

扶余から吉林まで汽車で百キロメートルくらいあった。扶余から「前郭旗」という駅のあるところまでは、役所の車で行けた。日本統治時代は満人でもロシア人でもこちらの指示をきいて運転をしてくれたものだった。戦争に負けてからは現地の人はもう誰も日本人の言うことをきかなくなったそうだ。

あとで千葉さんに聞いたが、扶余から引揚げるときに馬車を頼んで行ったそうだ。「三汾河」というところから新京（現在の長春）に出た。日本人は集団でまとまって帰っては来たが、とても大変だったそうだ。

扶余で警察部長をしていた熊田さんという人は肺病だったが、引揚げるのに自信がないままに、妻と子供二人を殺し自分も自殺した。この人はいい人だった。

一般の警察官は質が悪かった。兵隊あがりの人が多く、ろくでなかった。

おれの部下で食料やネルなど反物であげたりして面倒をみてやった人で、郷田さんという人がお母さん達を呼び寄せてくれたそうだ。」

ー郷田さんの家はどこにあったの？

「吉林の町から外れたところだ、うちは町の中で二階建てのアパートだが、郷田さんは一戸建てだったろう。」

ー私の記憶にあるのは郷田さんの家のようだ。便

所の真ん前に丸いテーブルを置いてご飯を食べたこと、お母さんはいつもがまんをしなさいと言っていた。男の人たちがおおぜいいた。

無事日本に着いて汽車に乗って帰る途中、子供が多くて大変だろうと、満州にいるときに私たちにくれたはずの衣類を『返してくれ』といわれ、全部取り上げられた。折角苦労して背負ってきたのに、お母さんは本当に悔しかったようだった。

引揚げが始まるまでの一年間、どこかの収容所で過ごしたのかな。

お母さんが私たちを連れて、巻きたばことか手作りの人形などを売り歩いたことなども記憶にあるね。

お父さん、その頃のお母さんの苦労話をいろいろ聞かなかった？

「聞いただろうが忘れたな。あんたこそ覚えていないのか？」

ー私もみんな忘れてしまったね。お父さんが引揚げてきたとき、皆で水沢駅まで迎えに行ったでしょう。

私はお父さんと手をつなぎ、駅から真城の家に着くまで、引揚げたときの様子をずうっとお父さんに語り通して来た、と千代子叔母ちゃん（母の妹）に言われたことがある。話さないでいられなかったんだね。

そういえば毎日ご飯の後は、満州の話になり、家族中で涙を流したり、笑ったりしていたね。

お母さんは、あの頃の苦労話やら何やら書いておきたいと、よく言っていたね。

それから、皆で「流れる星は生きている」という映画を見に行ったとき、私たちが引揚げで体験したと同じような場面がずっと続くので、私を始め秋美も洋も大泣きに泣いたりしてひどかったとか。

幼いながらも何か感じたんだな、などということもお母さんから聞かされたね。やはりそのつど記録しておくべきだったのね。

そんなことを思い合わせると、『立ち退き命令』で吉林を離れてから、日本に到着するまでの一年間は、郷田さんと行動を共にしたんだね。この頃いろいろと聞いて分かってきたのは、あき叔母ちゃんは開拓団の人たちと、房子叔母ちゃんは親戚の人たちと共に引揚げてきたということよ。お母さんと私たちは郷田さんとだったんだね。

五　父の召集

ーお父さんが召集を受けて発つとき、隣のおばさんがわたしと秋美を見送りに連れて行ってくれた。おかあさんは洋美を生んだばかりだから、行けないと。

「あれはね、送りになど来なくて良かった。秋美にお父さんと一緒に家に帰ると泣かれた。ロシアの侵攻にそなえた作業ということでひた隠しにしてこそこそと行ったのさ。」

ーお父さんは召集されてから、どこで何をしていたの？

「教育召集といわれていたが、最初に北満の北安（現在の黒竜江省）に連れていかれ、テント生活をしながら、壕掘りをしていた。

あるとき、下士官に呼ばれた。原隊に手紙などを取りに行って来いといわれた。行くと三人の転勤命令がきている。おまえが行けと言われた。新京（長春）に移動した。

そこでも広い畑に壕を掘った。ロシアの戦車部隊が来たら、爆弾を抱えて壕に入り戦車を爆破するのだ、と下士官に言われ続けていたから、戦車の下敷きになって死ぬ自分の穴掘りをしているのだ、とばかり思って諦めていた。

八月十五日新京の満映講堂に集められた。そこで天皇の敗戦の詔勅を聞いた。皆で泣いた。

ある下士官は、

『日本が勝ったら、日本は目茶苦茶になったんだよ。陸軍は横暴を極めていた。助かったよ。』

と言っていた。

その後、

『内地に帰るのに北海道から上陸する。全員ここに待機していろ。』

と言われた。

逃亡した人がいたのは、このときなのだ。あるとき便所に行ったら、

『酒井さんじゃないか？』

と声をかけられた。

見ると同郷の元三郎さんだ。偉くなっていた。元気なことを喜びあった。ところが彼はその時逃亡するつもりだった。そして無事に日本に帰った。

『港さんは無事だきっと帰ってくる』

と伝えてくれたそうだ。

おれはそのとき誘われても行かなかっただろう。逃げた人は沢山いたが、途中で殺され黍畑に死体がゴロゴロしているということを聞いていたから。

生きて帰る、絶対生きて帰らなきゃ、と思うと逃げられなかった。元気でさえいれば必ず帰れると思った。

部隊長が、話のある人は来いというので行った。妻や子を敵地の吉林に残している。ここから近いから帰してくれ、とうんと頼んだ。

そしたら、一人でも帰したら、隊長が銃殺になる。帰すわけにはいかない、と言われた。

その時、沢山の兵隊がこれほど苦労している。一人ぐらい殺されてもいいじゃないかと、よほど言おうとしたが堪えた。

後で、帰してくれと言ってきたのがいた、と話題になったそうだ。」

六　抑留生活

「新京から貨車でロシアとの国境の町の黒河まで運ばれた。黒竜江（アムール河）が凍るのを待って、国境の河を歩いて渡った。

対岸のロシア領のウラゴエチェンスクの町へ着いたとき、ロシアの子供たちが、かばんを引ったくろうとした。おれはぶん殴ってふっとばした。周りの人はやめろとか、やれとか言っていた。

ウランバートルまでの行軍はとてもひどかった。着るもの持つものなんでも身に着けた。夜、堤防のようなところに野営する。干し草があったので、それを被った。寒いので目が覚めた。見たらみんな剥ぎとられていた。

シートも何もない無蓋車のトラックで移動した。

途中に泊る場所といえば車庫の土間だった。

寒さで凍死しないように将校達は案じた。

非常食料の米を全部出して炊いて、飯盒に入れた。水筒に熱湯を入れた。熱いめしを腹一杯詰め込んだ。その飯盒と水筒と着ている防寒用の皮コートで暖をとった。冷たい土間で寝泊まりしたが、だれも死ぬ者はいなかった。

そこで隊長はえらいことを考えるものだなと思った。一大隊千五百人が行った。大隊長は小林太郎という人だった。

復員してきてからも、大隊は「外蒙太郎会」を結成して、時々集まりを持っている。

外蒙古のウランバートルに着いた。建物は警察教習所だった。ロシアの捕虜として、伐採などの労働をさせられた。冬期、三分の一の人が凍死するような厳しいところだ。日本に帰国できたのは五百人だった。

おれの仕事は食事の当番が主だった。
子供達は無事に帰ったかな、思わないときはなかった。
『おれは元気だよ』
と、夜空に浮かぶお月さんを見て頼んだよ。
このお月さんを家族皆も見てくれているだろうから、思いが届いてくれると願った。
朝も井戸のところに立って、日の出に向かって手を合わせて、無事に帰してくれと拝んだ。
一度黄疸に罹りシーツまで真黄色になった。金歯をぎりぎり抜いて、それと交換してキヤベツをうんと食った。食料を手配する従業員に頼んで、蒙古人と掛け合ってもらったんだ。
こんなところで死んじゃおれない、どんなことしても帰らなきゃと思った。」

ー炊事当番をするようになったきっかけは、何だったの？
伐採などの重労働をしていたら身体がもたなかったかもしれないね。
「年若い少尉がいた。腹をこわした。よくおれに飯をくれと言う。おれもそんなに分けてやれない。
そこで、おれを飯炊きにしたら、どんなことをしても続けるよ、と頼んだ。そしたら強引に飯炊きにさせてくれた。終始一貫交替させられないで飯炊きをしてきた。
帰国することになって、乗船の時検査をうけた。倉庫当番をしてきたのかと聞かれた。炊事だというと、良い体している、と言われた。
収容所で籾が与えられたことがあったが、そのままではとても食えない。
おじいさんの主計少尉がいた。
『ひき臼を作った経験者出てこい』
おれも、おれもと出てきた。臼を作った。
千五百人もいれば、大工も左官も乞食もなんでもいるもんだな。
麻雀の牌も作った。木を刻む、数字や文字を彫る、色をつける。出来あがったときは、みんなとても喜んだ。次々と回して楽しんだ。
箕（み）を作る人だけはいなくて、おれとその少尉とで作った。
玄米を煮たら、みんな喜んだな、米の飯は一年ぶりだと。
炊事当番だけビール瓶に入れて搗いた白米を食った。若い少尉にもやった。なんという名前だったかな。酒井に助けられたと言った。

みんな腹減って、炊事場の玄関に盗りに来るし、牛の残した食べかすも食った。

糧秣受領に来る兵隊が情報を集めてきた。あちこち引揚げがはじまった。次はおれ達の所で集合がかかった。物を持って集まった。

班長は星三つの曹長だった。胸に三つ星をつけていた。情報通の兵隊が三つ星など着けていたら残されるよ、と言った。班長はすぐ星を外した。

おとなしい兵隊は帰さないとも言われた。我々は共産党のインターなんとかを、うんと声を張り上げて大声で歌った。

船着き場で、物を持つな持つなという。

少佐、大佐などの佐官（将校）は帰さないで、伐採に残すという人民裁判があった。」

―人民裁判って何のこと？

「部隊全員が車座になった。裁くのは日本人の共産党員だ。何をいわれるか、怖かった。いい訳もできない。ロシア側が帰す、と言うのに、なんということだと思った。

上官達は残された。泣きながら戻って行った。

共産党員は青森県の人が多かった。

七　父の帰国

「昭和二十二年（一九四七年）九月、無事に復員した。

ハバロフスクで乗船するため船着き場に出た。そこに汚れたノートを見つけた。

『酒井港お先にかえります。』と書いた。

同じ年の十一月、弟正三が同じハバロフスクの港で、そのノートを見つけた。

兄貴が無事帰った、帰ったと仲間達と喜びあったそうだ。

正三は日本に上陸してすぐに打電、「兄帰るを知り歓喜に耐えぬ。」電報が来た。

正三叔父は語る

「おれは本当にうれしかった。兄貴はとても優しく兄弟の面倒を見、両親もとても信頼していた。家は兄貴が治めなければならない、兄貴しかいないと思い続けていた。だから本当にうれしかった。」

またこの叔父は満豪開拓青少年義勇軍として軍隊教育を受け、召集を受けたときは星三つだった。新しく召集された人たちの教育係をしていた。

「臨時招集の兵隊達は何をしてきた人も、年齢が上

の人も、どんな学歴の人も、星一つの二等兵で、古参兵から何かにと文句をつけられてびんびんと叩かれて、いわゆる「鉄拳制裁」を受けて、徹底していじめ抜かれる。

それを見ていると、兄さんもこのようにされているんでないかと兄嫁（私の母）に心配の手紙を送った。食べ物も送ってくれとも書いた。」

後で父に聞くと

「そういえば、お母さんから煎った大豆のようなものを送られた」

と言っていた。

「ナホトカから乗った引き揚げ船の興安丸で自分の部屋に入り、炊事場から、旨いものを貰ってたべた。舞鶴につき、検査を受けた。東本願寺に一泊して、郷里に向かった。一ノ関から乗った。白山のおじいさんとばったり会った。

『子供たちは？』

『みんな無事に帰った。』

そうか、みんな無事に帰ったか。うれしかったな。

もし一人でも満州に置き去りにしてきたのであれば、すぐ探しに戻るつもりだったから。

戦争のころのあんなこんなは、一日も早くおれの記憶から消えてほしい。本当にああいう思いは辛い、二度と嫌だな。

応召するとき、子ども等を後に残したことが一番辛かった。

もしも、皆死んだなどということがあったりしたら、おれも生きて帰る気持などまったくなかっただろう。」

＊酒井　港

大正五年（一九一六年）

岩手県水沢市真城生れ。

八十五歳

写真

父が持ち帰った手製のマージャン牌

垂乳根の里便り

千三百年前史・その4

後藤野開拓の公民館活動について 折居次郎・ミツ夫妻に聞く

・石川純子

プロローグ

前回は戦争に関する本が、なぜ一つの町から同時に二冊も出たのか、その不思議を小原徳志さんのお話から解明しました。昭和三十年代にくり広げられた和賀町の生活記録運動、母と保健婦の集い、平和運動などが背景にあってのことで、小原徳志さん、菊地敬一先生の個人的な才能だけではなかったのです。

同時にまた麗ら舎読書会のメンバーである折居ミツさん、小原昭さんの戦争体験の本が、後藤野開拓から生まれたわけも理解できたような気がしました。

和賀町の文化運動の盛り上がり。その和賀町のなかでも突出していたのが、後藤野公民館活動だったそうです。そこにも折居次郎さんというリーダーがおられたのです。

今回はそのつづきで折居次郎、ミツ夫妻から、当時の話を聞きました。次郎さんは大正六年生まれで八十五歳、ミツさんは大正十三年生まれで七十七歳になられました。

1、後藤野（ごとうの）開拓の公民館長

次郎・・　後藤野公民館の活動には熱気があったって、小原徳志さんが言ったんですか？

そうですか、そりゃ、燃えてましたよ。あのころ燃えてなきゃ、生きられなかった。こっちが燃えているのだから、ここに来た人たちだって生き生きしますよ。

小原徳志さん、ここに来る頃まるっきりやせてぽこぽこって、いっつも風邪引いたような格好していたな、身体が弱くって。それでも芯が強くって、一生懸命主張する人だった。理屈が通れば、とことん面倒を見てもらったお。

ミミツ・・徳志さんは、やさしくてやさしくてやさしい人だったよ。あの人に、人にされたね。私、書くというの教えられたの、徳志さんなんだもの。なんでもいいから書け、書けっていわれて鉛筆なめなめ書いた。それでできたのが『満州に幼な子を残して』なの。

へぇ、徳志さん、七十七になるって！　じゃ、私と同じなんだ。私はずっと年上の人だと思っていたよ。

次郎・・後藤野公民館の文化活動？

そんな文化活動なんて意識していませんよ。そんな大それたことでなくって、自分で何かをやりたいというので一生懸命だったですね。誰に頼まれてやったわけでもなく、自らやったの。

その根っこですか？　わし自身があこがれて、この後藤野開拓に新天地をつくろうと思って入植した。そのころ開拓の子供ら、七キロも歩いて藤根小学校に通っていた。雪の中をですよ。みんなで役場にかけ合って、二十八年に冬期分校ができた。その建物が後藤野開拓の集会場となり、三十一年ですね、「わしが館長やるから」って、正式に公民館の館長になったの。

とにかく集まり持ったね。ここは五十戸あるが全員新しく入植した人たちで、今日よりも明日、明日よりも明後日、いい生活をしたいと思っているのだから、講習会や映画会なんか開くと、みんな集まった。新しいことに飢えていたんだから。見るもの聞くもの、なんでも珍しい。喜んで目を丸くして集まったの。それこそ『物言わぬ農民』で・・。いや、だんだん物言い過ぎる農民になってきたが、みんなおとなしい好い人たちばかりだった。そのくせ何かを吸収したくって目を輝かせて集まった。あの目の輝きなぁ。

そういえば公民館を引き受けたのは、わしが四十二の厄年のときだった。それで北上から「ギターを抱いた渡り鳥」って、石原裕次郎の映画を三千円で頼んできて、みんなに見せた。歳祝いの記

念に映画を立てて、わしが、おごったの。

なんで「ギターを抱いた渡り鳥」だったのかって？

たまたまそれが北上に来ていたからで・・。

この辺は四十二の歳祝いが盛んなんだが、とっても貧乏でできないから、合同でやるべといい出したのが、わし。この映画がその最初だったね。それからずっと、まだつづいているよ。集まって酒こ呑んだり、踊りっこ踊ったり・・。赤帽子かぶって、赤い法被（はっぴ）こ着て正面に座って・・。

だいたい満州で新天地を作る夢がなくなったから、再度こっちでやろうというのに、開拓、開拓ってさげすまれて、世の中の最低の評判でね。みんな、しょんぼりと肩をすくめて歩いておったもんだお。だからわしは言ったの、「貧乏は楽しいもんだ」って。「新しい世の中を作るのはおれたちなんだ」って、『後藤野』という館報を作って自分でガリ切って、毎月檄（げき）を飛ばしたの。まぁ、檄を飛ばしたといえば、わしだけやったようだがとにかく騒いだのはおれ。それで、みんなでやったの。

本当にやりがいがあったの。だから小原徳志さんもその気になってね。社会教育主事としての仕事なんでしょうが、本当によくやってもらいましたよ。

そうだ！目の輝きといえば、あの当時の目を中国の免渡河（めんとか）の学校を訪問したときに、何十年ぶりかで思い出しましたよ。免渡河の学校っていうの

はね、わしら満州の免渡河に入植した時に、満州の教務部の認可を得て作った学校。

そう、そう、小原昭さんが書いた『ホロンバイルは遠かった』の中に書いてありますね。わしら昭さんのことを、当時、昭坊、昭坊と呼んだが、その昭坊が通った学校。

その時の学校がいまだに使われていると聞いたので、平成二年に四十五年ぶりに尋ねてみた。したら四百人もの生徒達が、赤いスカーフを振ってずらり並んで迎えてくれた。

その人垣のなかをブラスバンドを先頭にして歩いたときは、あまりの歓迎に照れくさかったが、校庭の高い壇上に上って挨拶したとき、四百人の目の玉がぐっと迫ってきた。きらきらっとして、いちずで真剣な眼！

そのときに思い出しましたよ、あの当時の後藤野開拓の人たちの目を。

2、高村光太郎の詩が支え

さぁて、公民館の館報に何を書いたかと聞かれても忘れてしまったが、貧乏の楽しさとか、さぁ元気を出してやろうとか、そのうちいいことがあるからとか、そんなことばり書いたような気がするな。あのあたりは高村光太郎の詩が支えだったですよ。光太郎が岩手県の開拓のために書いてくれた詩がある。ほら、これに載ってます。（＊といって『荒野に根をはって・和賀町戦後開拓史』

という本を見せてくれる。）

この本はこの和賀町の開拓の記録です。

いや、いや、後藤野開拓だけじゃなくて、この町には夏油（ゲとう）地区、石曽根地区、小吹野・大畑野地区、大官森・横川目地区と、開拓が五つもある。それら全部の記録。

この本こ作るのにも、小原徳志さんにうんとお世話になったの。文化運動といえば、こういうのを残すことだろうが、徳志さんがいなかったら、こんな本できなかったね。まぁ、その話はあとにして、光太郎の詩ですが、ほら、ここに二つ載っている。前の詩が開拓五周年、後のが開拓十周年に書いてもらってるの。

そう、二回もですよ。五周年というのは、昭和二十五年にやった大会ですね。十周年というのは昭和三十年。

なして、高村光太郎が書いてくれた？　岩手県の開拓者連盟の委員に、藤原嘉藤治（かとうじ）さんという詩人がおってね。たしか紫波の東根山麓に入植した人です。

その人、宮沢賢治と関係ないかって？

そう、そう、賢治と友達だったんじゃないですか。その関係で高村光太郎の弟子のようになっていて、その嘉藤治さんの発案で、高村光太郎さんに励ましてもらうべってことで頼んだと聞いてますね。詳しいことはわからんですが、その人が光太郎さんのとこにドブロクを下げて行って書いてもらったって・・。

開拓者は光太郎直筆のこの詩のコピーを、みんな持ってますよ。どれ、読んでみますか。

開拓に寄す　　高村光太郎

岩手開拓五周年
二萬戸、二萬町歩
人間ひとりひとりが成しとげた
いにしへの国造りをここに見る
エジプト時代と笑ふものよ
火田の民とおとしめるものよ
その笑ひの終わらぬうち
そのおとしめの果てぬうちに
人は黙ってこの広大な土地をひらいた
見渡す限りのツツジの株を掘り起こし
掘っても掘ってもガチリと出る石ころに悩まされ
藤や蕨(わらび)のどこまでも這う細根に挑まれ
スズラン地帯やイタドリ地帯の
酸性土壌に手をやいて
宮沢賢治のタンカルや
源始そのものの石灰を唯ひとつの力として
何にもない終戦以来を戦った人がここに居る

トラクターもブルトーザーも、
そんな気のきいたものは他国の話
神代にかへった神々が鍬をふるって
無から有を生む奇蹟を行じ、
二萬町歩の曠土が人の命の糧となる

麦や大豆や大根やキャベツの畑となった
そういう歴史がここにある
五年の試練に辛くも堪えて
落ちる者は落ち、去る者は去り
あとに残って静かにつよい
くろがね色の逞ましい魂の抱くものこそ
人のいうフロンティヤの精神
切りひらきの決意
ぎりぎりの一念
白刃上を走るものだ
開拓の精神を失ふ時
人類は腐り、
開拓の精神を持つ時
人類は生きる

精神の熟土に活を與へるもの
開拓の外にない

開拓の人は進取の人
新知識に飢えて
実行に早い
開拓の人は機会をのがさず
運命をとらへ
万般を探って一事を決し
今日は昨日にあらずして
しかも十年を一日とする
心ゆたかに
平気の平左で
よもやと思う極限さえも突破する

開拓は後の雁だが
いつのまにか先の雁になりそうだ

開拓五周年
二萬戸、二萬町歩
岩手の原野山林が
今、第一義の境に変貌して
人を養うもろもろの命の糧を生んでいる

スゴい詩だって。感激した？　門外漢のあんたさえ、そうなんだもの、わしら、当事者なんだもの。この通りだったですよ。ここは神代の時代から、神さえ見向きもしない土地だった。強酸性の上に石ころだらけ。表土ゼロという土地なの。

赤松とツツジが酸性土壌を喜ぶから、ツツジの名所みたいなとこで、それを開墾鍬だの、ツルハシだの、鉄の棒で掘ったの。悪戦苦闘、尋常一様にはいかなかったね。奥羽山麓はみなそうなの。

神代の昔から見捨てられた土地に入ってやったのだから、わしら、昭和の国造りの神様だなんていったもんだが、今だってその石で苦労しているんだよ。あるなんてもんじゃない。河原みたいなところもある。大っきな石はどけたが、しかしつぎからつぎと石。表土がゼロなんだから、底はみな砂利。アメリカまで砂利がある。

なしてそんな苦労する所に入植したかって？

ンだって、わしがシベリアから戻って来たの、二十三年なんだお。終戦後三年も経っている。

ミミツ・・この夫（いと）、シベリアに抑留されて、私三年待ったよ。私は先に満州から戻っていたの。

次郎・・二十三年に帰ってきたんだもの、いいとこに行きたいなんていったって、どこの土地もみな埋まっている。といっても、どこの開拓地だって、いいとこなんてありっこないの。だいたい終戦後開拓するところなんて、どうしょうもない土地、くれてやるといわれても誰もいらない土地しかなかったんだから。それを耕土にするんだもの、まったくこの詩のとおりだった。

ミミツ・・五町歩の根っこを掘り、石を拾って馬車で運んだんだよ。掘った根っこは一列にずーと並べて、一斉にそれに火をつける。村の人達が火事だって大騒ぎなの。消防車も来るんですよ。何回もそれ、やったの。

次郎・・まったくこの詩のとおり。光太郎は自分が実際にやったように書いてるが、自分でやったと同じだと思う。太田開拓をそばでじっと見とったんだから。光太郎が終戦のとき、自分で自分を責めて、花巻の奥に小屋を作って棲（す）んだ。その高村山荘の辺りが太田開拓なの。あそこはこの後藤野開拓から横志田開拓、清水開拓、太田開拓とつながっているんですよ。

この詩のなかで一番いいところ？

やっぱ最後のほうですね。いまこそこんな生活

をしているが、そのうちに先の雁になるんだといったもんですよ。

実際ここに入植したころは、開拓者というのは人間の部類に入らない。一級下の階級になっていた。もっとも開拓はひどかった。ボロ着て、食い物はないし住む家もない。あれだけいわれてもしょうがないが、別の人種というふうに思われた。しかし後の雁が先になるという意気だった。そして現になっている。ないないたって、それこそ欠けた茶碗もなかったのが、少なくとも既存農家と同じになった。彼ら以下ではない。

そりゃ、一生懸命やったからですよ。いや、一生懸命やったばかりじゃない。世の中がこんなふうになって、百姓の存在価値がなくなったというのもあるね。ここの開拓だって暮らしが良くなったといったって、百姓で良くなったのいないな。

わしら、この詩が支えになったのだが、どういうわけか、高村光太郎詩集にこの詩、載っていないね。光太郎記念館にもなかった。たいがいの開拓者の家ではこれ、額に入れて持ってますよ。

3、酪農講座で勉強

公民館の集まりというのは、百姓だから一番先に作物の話、肥料の話、農機具の話をしたり、その映画を見たり、養豚講座なんかもやったし・・

ミミツ・・なんに知らないとこに牛が来たから

酪農講座が流行(はや)ったね。もちろん、最初は一頭から。もうびっくり。さわるのも恐(お)っかなくて。その牛の乳も飲めなくって、かわりに脱脂乳を安く買って、冷蔵庫もない時代だから井戸にぶら下げてて飲んだの。金にしたくって。

次郎・・それこそ脱脂乳を飲んで、主食のようにカボチャやさつまいもを食って、腹が張って屁が出て・・

牛を入れたのですか？　昭和二十七年からで、それからは冬になると、夜通し酪農の講習会を開いて勉強しました。

ほら、この『和賀町戦後開拓史』の七十三ページに当時の酪農講座のチラシが載っているが、ごらんなってください。昭和三十五年十月から三十六年の三月とあるから、冬期間集まって目一杯勉強してますな。

このチラシ？　いや、いや、わしが書いたのではなくて、小原徳志さんが書いてくれたの。こういう先生の話っこ、聞きたいっていうと、徳志さんが講師先生との交渉から何から、全部やってくれた。この呼びかけも書いてくれたんだが・・。いや、待てよ、これは徳志さんが毛沢東の本から引用したのだね。

「世の中で一番滑稽なのは「知ったかぶりの物知り屋」が聞きかじりの生半可な知識を持っているだけで、自分こそ「天下第一」と

うぬぼれることである。こんな連中こそ自分の力を知らないもののよい例である。知識の問題は科学の問題であり、いささかの虚偽や傲慢さもあってはならず、その反対のもの・・誠実さと謙虚な態度・・が決定的に必要とされるのである。知識を得たいならば、現実を変革する実践に参加しなければならない。梨のうまい味を知りたいならば、自分でそれを食べて、梨を変革しなければならない。

（実践論）

今読むと、スゴいこと書いてますね。そうだそうだ、おれもやろうって気を起こさせようとしたんだね。こういうのが、当時の講座の呼びかけに入っていたとは驚きですな。

この酪農講座はここだけでやったの。勉強したのは、ここの後藤野開拓だけ。一軒から二人来たところもあるし、男も女も来たから五十人以上集まったね。

秋の乳牛祭から始まって、たくさんの講義をはりきって受けたんですよ。講師に、ひざ詰めで聞くほど真剣でした。

ほら、ここに書いてある講師陣の顔ぶれを見てください。北海道大学の黒沢亮介教授、それから北海道酪農大学からは、中曽根教授、三浦所太郎教授、それに阿部友一先生と三人も来ている。

それこそ三浦所太郎教授には、「北欧酪農民の生活と信念」といった講座で、酪農王国デンマー

クのことを教えられたの。この人はデンマークで暮らしてきた人なんですよ。

デンマークの農民が戦争で打ちのめされ、土地も何もかも奪られてなくなった。しかし海を干拓して土地をふやし、その不毛な地に牧草を作付けし、牛飼いをして酪農王国を作った。今じゃ立派な酪農経営で、愉しい生活をしているなんて話を聞いたもんです。このデンマーク農業がわしらの夢で、よーし、ここでも！と思いましたね。あのころはボヤ助では酪農できねんだと、最先端をいく気でいましたよ。

三浦所太郎さんはあとで東山に自分の農場を開いた人で、有名な牧師さん。衆議院議員だった菅原喜重郎は、この人の弟子です。

阿部友一先生も、あとで衣川に酪農大学の分校をつくった人ですね。日本でも一流の先生方ですよ。それに県の酪農事務課長の瀬川明さん、農業試験場の小原先生。実践家ばかりでなくって本当の指導者なの。

ミミツ・・婦人会でも三浦所太郎さんを頼んでデンマークの食生活とかいろいろ聞いたわけ。デンマークでは家事を立派な職業として、誇りをもってやってるなんて聞くと、日本の私たちもそうなればいいなぁなんて、夢をもらったんだよ。だから開拓といったって、明るかったの。楽しかったの。わざわざ北海道から栄養士の先生を呼んで料理を習ったり・・。

次郎・・それは雪印おかかえの栄養士、北村キク女史。牛乳の消費拡大の宣伝役なんだが、こったな小さな田舎に来る人でないのに、雪印の工場長に頼んで、特別来てもらったの。

「これは天皇陛下に差し上げたババロアです」なんて、ババロアだの、ドーナツの作り方なんか習ったんだお。

あの当時、「乳と蜜の流れる里」・・これは賀川豊彦の名文句だが、理想的な農業の形態は牛乳をしぼって蜂蜜をなめて暮らすというのだった。そういう理想的な農村にしようと、わしら、頑張ったの。

ほら、ほら、この高村光太郎の二つ目の詩が、そのころのわしらの気持ちを、書いてくれてますよ。

開拓十周年

赤松のごぼう根がぐらぐらと
まだ動きながらあちこちに残っていても
見わたすかぎりはこの手がひらいた
十年辛苦の耕地の海だ

今はもう天地根元造りの小屋はない
あそこにあるのはブロック建築
サイロは高く絵のようだし
乳も出る、卵もとれる
ひょうきんものの山羊も鳴き
馬こはもとよりわれらの仲間

こまかい事を思い出すと
気の遠くなるような長い十年
だがまたこんなに早く十年が
とぶようにたつとも思わなかった
はじめてここの立ち木へ斧を入れた時の
あの悲壮な気持を昨日のように思いだす
歓迎されたり、疎外されたり
矛盾した取扱いになやみながら
死ぬかと思い、自滅かと思い
また立ちあがり、かじりついて
借金を返したり、ふやしたり
ともかくも、かくの通り今日も元気だ
開拓の精神にとりつかれると
ただのもうけ仕事は出来なくなる

何があっても前進
一歩でも未墾の領地につきすすむ
精神と物質との冒険
一生をかけ、二代三代に望みをかけて
開拓の鬼となるのがわれらの運命
食うものだけは自給したい
個人でも国家でも
これなくして真の独立はない
そういう天地の理に立つのがわれらだ
開拓の危機はいくどでもくぐろう
開拓は決して死なん

開拓に花のさく時
開拓に富の蓄積される時

国の経済は奥ぶかくなる
国の最低線にあえて立つわれら
十周年という区切り目を痛感して
ただ思うのは前方だ
足のふみしめるのは現在の地盤だ
静かに、強く、おめずおくせず
この運命をおうらかに記念しよう

一行一行がみんな胸にぐさりとささりますな。しかもわしらが思っていることを先取りしているから、それを目標にして、そこまで行こう、近づこうという力になりましたね。

そういえばこの本（『和賀町戦後開拓史』）の巻頭言はわしが書いたんだが、光太郎の詩の最後の二行・・「静かに、強く、おめずおくせず／この運命をおうらかに記念しよう」というのを意識して、

開拓者
なんといい響きだ
これが私達にあたえられた
勲章だ
今こそ高らかに
開拓者のあゆみを謳をう
この開拓史は
その勲記なのだ

と、書きましたが、ちょっと似てるでしょ。

4、あらゆる講座を設ける

酪農講座だけじゃないですよ。婦人講座、生活改善講座、料理講座、健康講座などあらゆる講座を精力的に開いた。地区民の要望には、必ず答えたですよ。飯も満足に食べられない当時、化粧講座をしてみたり・・。

なぁに、化粧したところで、牛蒡（ごぼう）や人参の白和（しらあ）え程度にはなるかと思っていたのに、大好評でした。モデルが二、三人出て、化粧してもらう。「きれいでしょ」「違うでしょ」なんていわれるから、モデルは気分がいい。クレオパトラにでもなったみたいなの。

はい、はい、わしは主催者だから見ておったですよ。当時クリームが三百円だかで、なんと高いもんだと思ったが、一年に何回もつけないから三年ぐらいは持つ。はた目には無駄に見えるが、本人は晴れやかな気分になるのだから、精神的には安いもんだと思いましたね。初めわしも飯も食えないのに・・と思ったが、効果は抜群でしたな。

健康講座ですか？　東北大あたりが、開拓巡回やってたんです。歯の講座をやったり・・。歯なんかみがくことないから、歯茎をみがけなんて教えられて、それ以来わしは今も続けてます。

そういえば石川武夫先生にも、何遍も来てもらってますよ。

武夫先生との縁ですか？　先生は岩手大学の農学の教授だから、入植当時生徒たちを連れて、開

拓地の実態調査に来たのが最初。あとは社会問題の講演じゃなかったかな。あの先生は話がおもしろい。いつも一人で熱上げて、狼みたいに壇上を往ったり来たりして興奮して講演するから。

そんなこんなのつき合いから、この妻の詩が本になった。（＊といって『開拓のかがり火』という冊子を見せてくれる）

石川武夫先生がこれを本こにするべって言ってくれて、小原徳志さんだの、沢田勝郎さんだの、川村光夫、愛子さん、小原麗子さん、石川忠見さんだのが、ここの羽山荘に泊まって相談したことがあるの。最初は『開拓のかがり火』という題で岩手県農村文化懇談会から出版するべということだった。しかし、「これだけではページ数が足りないからもっと書け」と宿題を残して解散した。それで「書け、書け」といったれば、「そう言われれば全然書けない」っていうわけ。

いつのことかって、これ見ると昭和五十二年と書いてるね。それからしばらくして、小原麗子さんたちのお世話で出すとなって、わしが石川武夫先生に行って了解をもらって、青磁社の阿部圭司さんのところから出した。そのときに題を『満州に幼な子を残して』にしたんですよ。

ミヽツ・・このあと、昭ちゃんの『ホロンバイルは遠かった』も、阿部圭司さんのところから出したんだよ。

とにかく公民館では書くこともやったからね。

書く講座もあって、生活を何でもいいから書きましょうって、徳志さんなんか一生懸命だったよ。

ほら、ここに書いてるよ。（といって昭和三十四年発行の和賀町の文集『せおと』の扉を見せてくれる）

自分のことでも　ホンネをかこう
まわりのことでも　くらしのなやみを
はっとしたことを　生活のよろこびを
口ではいえないことでも　話し合ったことを
ずばりとかこう　文字にしてみよう
エンピツとカミで　人間らしい
ものをいってみよう　生きがいのある
みじかくてもけっこう　くらしをきずくため

こどももおとなも
おとこもおんなも
みんなエンピツを
にぎろう
くらしのさけびを
字にしよう

そのころ私が書いたの、載ってるかって？
載ってる、載ってる、『ヘソクリ』っていうの。

ヘソクリ　折居ミツ

という言葉を聞くたびに
日本だけかしら
ヘソクリという

言葉のある国はと
私はさびしく考える
どうしてそうなるのかと
いつも思わずにいられない
それは女に自由がないからだ
旦那どのだけが頑として
サイフをおさえているためだ
一升二升三升と
ヘソクリをつくるために
女の手からヤミ米が流れてゆく
家計簿をつけ
家族会議を開いて
家を明るくしよう
ことしから正月を
新暦で祝うとともに
この和賀町の家々から
ヘソクリを追放しよう

「ホンネをかこう」ってあるから、ホンネを書いたんだよ。それから開拓関係でまとめたのが、こっちの文集で『わらび』というの。これは川村愛子先生がまとめてくれたんじゃないかな。徳志さんだけでなく愛子先生も来てくれたんだよ。

5、みんなと一緒に進もう

次郎・・講座だけじゃなくって、運動会だの収穫祭だの、子供らの劇なんかもやりましたな。

あのころは公民館を中心に、みんなまとまっていたからね。

予算ですか？　飲み食いには金はかけないが、講師の謝礼とかテキストを作るとかに、不自由したことはないですね。農村文化の農民講座をやるから金を出してくれって、その気になれば、どこでも金を出すよ。どうしてもというときには農政課に行ったり農協に行ったり、雪印に行ったり。金がなくてやれなかった行事は、一つもないですね。みんなどこかで応援してくれた。だから今でも何かやるとき予算がないなんていうのは、やる気がないからだと、わしはいうとるの。

ミツ・・とにかく公民館活動が盛んだったからここの子供ら、貧乏に負けないで明るく育ったんだよ。

まんツ、この夫（いと）、公のこと、いろいろ受け持ってやったんだもの。お墓もつくったんだよ、墓地公園を。だから家庭なんて考えなかったんだね。畑なんか草だらけで、野菜も満足に食えなかったよ。赤茶けたスカンポ畑は、折居次郎の畑だって有名だったんだから。

次郎・・家庭を考えないわけないよ。家庭を考えるから、地区が絶対進まなきゃないと考えたの。自分のことだけでやるといったら、こういう成果、上がるわけないし、一人でこういうことできるわけない。自分の向上をはかるためには、一

人ではダメだから、みんなと一緒に進もうというのが、わしの信念なの。いまだってそうだ。地域と一緒にというのが、わしの信念なの。

ミツ・・それに負けないように、私も早く起きて仕事をかたづけて参加したわけ。隣では、「折居さんに歩いてもらうから」って、野菜をしょっちゅう持ってきてくれたの。もらった、もらった。そうやって生きて来たの。

そのうえに「今日は一人泊まりだぞ！」、「二人泊まりだぞ！」って、壁土がポソポソ落ちるような家にお客さんを連れてくる。よその人たちが沢山くるもんだから、隣近所のありそうな家から米から魚から酒から借りてきて、煮たり焼いたりして、それをテーブルに出して、食べてる間に今度は布団を借りに歩いたの。それは誰も知らないの、そんな私の苦労は。

6、宗教講座から墓地公園づくり

次郎・・墓といえば、公民館長時代、宗教講座なんていうのもしましたよ。お墓をつくるために、みんなで勉強したの。そのことでも徳志さんに世話になったな。

なしてお墓かって、開拓者としての第一の条件は井戸を掘ることと、墓地をつくることと昔からいわれている。そこを動かないようにってことだね。墓を持っていれば、人はその土地から離れな

いって。もちろん満州のときだって、すぐ墓をつくりましたよ。あそこには昭ちゃんのお父さんが眠ってます。

ここの墓地公園をつくったのは、昭和四十九年だから、わしはまだ五十代。墓をつくると早く死ぬんだと、みんなにいわれ、「よし！ンだら引き受ける」って。なしてって、そういうのは迷信だってこと。しかし、副委員長二人は、先に死んでしまったなぁ。

徳志さんに、お墓のことで相談したら、

「ンだなぁ、岩手大学の沢藤先生がいいなぁ。あの先生、造園学だから」

って紹介してもらって、なんぼ助かったか。その他にも碧祥寺の太田さんや、国見山の首藤さんだの、講師の紹介はみな徳志さん。それで二、三年、宗教講座を開いて勉強した。本当は公民館で宗教講座を開くの、禁じられてるんだけどもね。まぁ、講座なんて大げさなもんでないが、墓に対する知識を得ようとしたの。

ミツ・・この夫、先頭に立ってお墓の見学に歩ったんだよ、みんな連れて。今年は四人も亡くなってるから、あのときお墓つくっておいてよかったって、みんな感謝してるの。

次郎・・最終的には沢藤教授にお墓の設計を頼んで、いろんな様式のプランを立ててもらってその図面をみんなで比較検討した。それだって、

もめてもめてもめ果てて、最後はアンケートを取って、金は二十万、形はみんな同じというふうになった。金のほうは三年ばり前から積み立てを月に千円づつやっていたが、一年に一万二千円でしょ。二十万の墓をつくるのにいつまでかかるか。

「こんでは建たねんだ。死ぬのさ間に合わね。この際、金を借りても先につくってしまうべ」

となって、当時、わしが農協の理事をやっていたから、農協から借りることにした。

場所を決めるったって、大問題。墓地を買わなきゃない。ところが勉強していくうちに、これからは私有の墓地は許可ならないということがわかった。これはいいことを聞いた。よしきた！町立が一番、町立の墓地公園にしたい、この土地を町で買ってけろと交渉した。それが通ったから、県下の石屋をみんなで回り、思い立ったら吉日だ！今年のお盆までに仕上げようって、春先に決めてお盆までに出来(でか)してしまうのだから、それからが忙しかった。木を伐って、鍬入れした日に、

「ンだら、わし、落成式の段取りに盛岡さ行って、県知事さ頼んでくるから」

って、落成式の準備にかかった。これがよかったの。県庁の秘書室にちょこちょこ入っていって

「県知事に用があって来たのだが、どなたと話したらよがべ？」

といったら、みんな一斉に振り向いた。したれば、ぽつんと離れた隅っこに座っていた人が、

「ン？　何ですか？　私が伺いましょう」

って助けてくれた。その人、私設秘書の卓地という人だった。今度こういうわけで墓地公園をつくるし、開拓記念碑を建てる。碑文は知事に揮毫してもらいたいし、落成式には知事にぜひ来てもらいたくてお願いに上がったのだが、どこにどう頼めばいいのかと聞いてみた。そしたら、

「なに、私が伺えばいいです」

「そうですか。県会議員だの、町長だの頼まなくっていいんですか」

「いらない、いらない。なに、ちょうど知事がいるから、直接頼んだほうがいい」

って知事室に通してくれた。思わぬ事態に、小さくなって知事の前に頭を下げたら、気さくに、

「やぁーやぁー、ご苦労さん。今、秘書から聞いた。後藤野のみなさんのご苦労には、一遍激励に行かなくてはと思っていたが、なかなか行けなかった。よがす、よがす、今度こそは行くから」

というのだから案ずるより産むが易しだった。

役場に伝えたら、

「まさか、だぁりゃ、県知事が来るべ」

って、誰も本気にしない。ところが本当だとなったら、

「なんで、そったなこと、独断で決めるのや」

って怒る始末。ンでもあくる日からブルトーザーで、その辺の道路にザーと砂利を敷いてくれた。

わし、いったんだよ。

「知事が来るっツ、墓のあたりの道路、デコボコデで茨(ばら)だらけのとこ歩かせる気か。知事の膝株(ひざかぶ)

さ茨(ばら)着いたりしたら、町長が笑われるんだ」

って。そんなことで林の木伐りが始まったばりで、県知事の方が先に決まってしまったが、それがよかったの。さぁ、県知事が来るぞ、来るぞ、落成式に間に合え、間に合えと、それが合言葉になって、工事が進んだのだから。

なに、次郎流が効を奏した？　いや、いや、無鉄砲でね。誰にも頼まれないのに、自分で行ってね。未知のところに行くのがおもしろいの。

落成式当日のご馳走は、後藤野にカボチャだのさつまいもだのいっぱいあるから、そういうのを料理してタップリ食わせるつもりでいたわけ。そしたら「保健所でございます」というのが来て、「折居さんの家ですか」ていうから、そうだっていったれば、

「県知事が来るそうですが、何人くらい？」

「四百人くらい」

「何を食わせる？」

「手料理で歓待します」

そしたら、やめでけろって。お盆の、しかも炎天下ではアメ臭ぐなったりして、集団中毒になったら大変だって。とんでもないいいがかりだと思ったが、言われてみればもっともな話だし・・。しかし予算がない。それで折詰にしたの。金は倍もかかって、上品だが中身はなんぼも入っていないの。

ミツ・・盛大だったよ。知事は来る。千田正

さんが来たの。和尚さんもぞろぞろ、十人近くも来た。それで満州から引き揚げてくるときに亡くした二人の子供、やっとお墓に入れてやれたの。

次郎・・墓地公園つくるときは、役場に日参したな。仕事の進捗具合で、毎日行ったの。

「また来たじゃ。気にするなよ。いいから、いいから、おれのとこかまわないで・・」

といったって役場の連中、気になるんだもな。墓地公園の担当は保健課長だが、徳志さんも間に入って困ったこともあったべ。

ミツ・・この夫(ひと)、こうして動くから、私、ひどかった。私は影の人。私は犠牲になったわけ。

次郎・・犠牲にしたくなくって、わし、いろんなことやれといわれても、手を出さなかった。家をつぶしたくなかったから。わし、世の中に貢献したとか、世の中のためになったとかは思ってませんよ。自分の身を守るためにやったの。だから四年ごとの選挙のたびに、悪口言われる立場には立つまいと思ってきた。

とにかく弱いものいじめするヤツ、黙って見ておれないの。こっち、いじめられる立場にばっかりあったから。世の中のどん底ばかり歩いてきたから。

それだって自分で好き好んでやったのだが・・満州の開拓もそうだし、こっちの開拓もそうだ。一回も浮かんだことがない。しかし、そうだから

いつも不幸で面白くないというわけではない。そこにはそこの楽しみはある。というよりも見つけて暮らしてきたというわけ。だから「貧乏も楽しいよ」って館報出したり・・反骨精神なんだね。

7、保安隊と飛行場誘致運動に反対

反骨精神といえば、ついでに話しますが、保安隊誘致運動があった時は反対して闘いましたよ。この後藤野がですね、なんでも保安上だか、国防上だかで、日本海と太平洋を結ぶ一番条件の良い所なんだそうです。だから兵隊をおきたい所なんだって。それでわしら追ん出して、練兵場にする構想があったの。それ、昭和二十九年のことだから、公民館の館長になる前の話です。

ミツ・・覚えてるもなにも大騒ぎしたもの。せっかく開墾して牛も来たというのに、追ん出すというわけ。

次郎・・だいたい戦争は二度とは沢山だし、ここにようやく根っこ張り出したのに追っ払らわれる。二十五年に入植して二十九年の話ですよ。村長だの、商工会だの、みな集まって誘致運動をやっているというところに、わしが呼ばれていってみたら、

「明日、県庁に陳情に行くから騒がないでけろ」

というんだ。わし、一人呼ばれたの。あいつが危

ないから、おさえろということだったでしょ。

こりゃ、いいこと聞いた。それを聞いて騒がないわけにいかないから、

「あんた方には申し訳ないが、わしは反対するから」

と宣言して、すぐ戻って緊急集会を開いた。そこで、

「おら達、先に行って陳情書を作って待ってるから、明日の朝女だち、子供を無理無理おぶってみな来い。子供、必ず連れて来いよ」

って、最終列車で盛岡さ行って、夜中に宿で陳情書を作った。あのときは三人で行って、わしが原稿書き、あとはガリ切り、印刷と手分けして、出来上がったのは夜が明けるころだった。

そしたら次の朝、女と子供が主体で百人くらい来たし、盛岡近辺の開拓団の人たちも加勢に来てくれた。それらがムシロ旗やらノボリやら、プラカードを作ってきた。そういうの好きなんだお。だから、県議会にムシロ旗立てていったの。

その前にわし、警察さ行って、

「今県庁まで行くところだが、いいですか？」

「集団で歩くのは届け出さなくっちゃねーども三々五々ならよがす」

「んだら、三々五々で行くべ」

って県庁さ行ったら、門衛に待ったをかけられた。知事に会いたいと申し入れたが、それもダメだとことわられた。

ちょうどわしが秘書課長を知っとったから、彼

のとこに行って、

「こうやって後藤野から、みんな来たども、せめて百姓知事の顔をちらっとでも見せて、後藤野の女(おなご)だちさ、開拓の苦労をねぎらってもらえねべが。なんとか頼む」

ってお願いをした。したら、

「よーし、ほだらば保安隊のことは言うなよ」

「言わね、言わね」

「反対陳情でなく、百姓談議だけだぞ」

って念押されて、陳情のことは言わないことにして、県知事の話っこ聞くことができた。

百姓知事っていうのはね、あのときは国分知事で国分農場の主だからそういったの。知事は、

「後藤野のみなさん、ご苦労様です。一度激励に行きたいと思いながら行けないでいた。燐酸と石灰チッ素を少しふって、豆をまきなさい。豆を食っていればマメで暮らせる」

なんて豆のつくり方を一通り話して、それでも最後に、

「開拓者は犠牲にしないよ。悪いようにしないから」

っていってくれて、ほっとした。

議会には陳情書、持って行ったの。陳情書というもの、議会の各派にみんなやらなきゃならないから、ずいぶん作らなきゃならないんだっけ。したら加藤勝夫という県会の副議長で、ここの農協の組合長やってるのが、議会の正面で待っていた。それが保安隊誘致期成同盟の大将なの。

「なるべく車通る所さ、邪魔になるように座れ」
なんて言ってるとこに出てきて、
「じゃじゃじゃじゃ、そこは邪魔になるから、こっちの方の控室に来て休んでくれ。これでパンでも買って食ってくれ」
とかって金一封、千円だか二千円だかよこされた。
「敵から塩をもらったな、いただきます」
って。そしたらいくら待っても議会が始まらない。どうした？　どうした？　と聞く度にあと一時間、あと一時間っていわれて、結局開かれないで終わったの。賛成と反対の陳情が同じ地元から同時に出たときは、どちらも採択されないことになっているんだって。

それで結局保安隊はここに来ないで、一本木に決まったの。後藤野と、岩手山麓のマガキ野と、一本木の三か所が候補地に上がっていたのだが、反対の少ない所にというのが常識でしょ。反対行動を大々的にやったから、それが功を奏したの。
誘致期成同盟会の言い分？　ここに保安隊が来れば、隊の食糧を買ってもらえるし、早い話が飲み屋だの、うどん屋だの流行（はや）る。そうなればネギだの大根だの芋が売れるべし、あんた方も収入が増えるし、村も発展するというの。ところが、そんなの、うそ、うそ。
わし、念のために仙台の宮城野原の保安隊に行ってみた。そしたら隊の野菜など、みな中央で入札して大量にどんと買ってしまって地元の芋なん

か買わないんだよ。実態は全然違うの。

ところがそれから四、五年して、またここが、今度は飛行場にねらわれた。飛行場誘致運動がおきたの。もちろん反対運動をしたよ。そのとき、わし、言ったよ。

「後藤野が平らでいいというなら、藤根の方、もっと平らだから、あっちのほうの水田をみなつぶして作ったらいがべ」

って。それも花巻に決まったが、あれだって誘致期成同盟会では、将来とも絶対拡張しないで、あんたがたに迷惑はかけないといったが、なぁにすぐ拡張したでしょ。いまだに更に拡張工事が進行中ですよ。

とにかく、わし、弱いものいじめとか、ごまかしとか見ておれないの。だから相当損してるのさ。いわゆる世渡り上手だと、立派に暮らしていたかもしれない。しかし立派な生活っていうのが、なにかというのが問題。一般的には金を持って暮らしてるのが立派と、世間は見る。しかし必ずしもそうでないもの。金はなくとも立派に暮らしている人もあるし・・

8、『和賀町戦後開拓史』の発刊

これら保安隊や飛行場誘致のいきさつについては、この『和賀町戦後開拓史』にちゃんと書いてあります。今となればこうして書き残しておいてよかったですよ。

作ったのですか？　昭和六十三年の十月です。

この本こを作ることになったのは、開拓振興会から和賀町の開拓に五十万の金が下りた。五十万といったって、分けてしまえば一人あたり何百円にしかならない。それで本こ作るべと、まぁ、わしがもちかけたわけ。そうは言ったって、

「本作るったって、誰、やるってや」

というようなもんだから、

「立派にできなくても、入植者の家族と写真だけでも収録して残すべ。おら達の名前、どこの本にも印刷されたことないのだから、それを書いて子供たちさ残すべ。それだけでもいいのだ」

って始めたの。その時小原徳志さん、助役になっていたから、本こ出したいが町で補助してくれないかって相談した。したら、

「なんぼ？」

「作ってみなきゃ・・」

「そんな予算ってあるもんでねぇ」

「五十万はあるから、不足分だけ」

「予算がなきゃ困るんだから、五十万、町さ寄付して、町で発行したことにすれば・・」

「それは大賛成だ」

これはね、徳志さんだから、やってくれたの。結局三百部作って九十何万かかって、出版の行事まで入れれば、百万越えたんでないですか。

出版祝賀会をやるといったら、ちょうど天皇陛下が死ぬとか生きるとかの時期で、なかなか決まらなくて・・。とっても待っていられないから、

それでは祝賀会ではなく、中身は同じだから記念会にして、みんなでお茶こ飲みながら思い出を語りましょうと、十月中にやってしまったの。

みんな喜んだですよ。五十万、寄付したというので町から表彰状はもらう。本は出来上がる。記念会のとき開拓者は一軒から二人ずつ呼ばれて、プラザホテルの主張パーテーで見たこともない料理を出され、それをご馳走になったんだから。

ところが、そこまでしてくれた徳志さんに、本当に申し訳ないことをしてしまったの。その出版記念会の招待名簿に、肝心の徳志さんが抜けていたんだよ。うっかりしてたの。

その時二人助役時代だから、壇上に徳志さんも並ぶはずなのに来ない。不思議でしょうがない。

一人の助役のつぎに、わしが座って

「なぁして、徳志さん来ねべ？」

「さぁ、なーにしたべなス？」

なんて言ってたの。あとで聞いたら、招待状来ないのに行かれないって。わし、申し訳ないっておわびしたの。本当に小原徳志さんのおかげで本が出たのに・・。今でもこうして語っていても、申し訳ないですよ。

やぁや、ずいぶん長い話になりましたな。何の話から、こったに長い話になったんでしたっけ？

そうか、後藤野公民館時代の話でしたな。後藤野のほうは、小原徳志さんたちが進めていた村の文化運動の影響で動いたというより、こちらの要望で向こうが動いてくれたってことですよ。

エピローグ

折居次郎さんを、私たちは尊敬と親しみをこめて「麗ら舎の長老」とお呼びしています。麗ら舎読書会の催しには必ず参加してくださる次郎さんに、育ててもらっていると思っているからです。

ところが灯台下暗しとはこのことで、今度聞き書きをさせていただき、何にもわかっていなかったことに愕然としました。一緒に読書会をつづけてきたミツさんについてはなおさらのことです。なにしろ肝心の「開拓」というものが、私にはまったくわかっていなかったのですから。

お二人は高村光太郎が「開拓に寄せて」で謳った「フロンティヤの精神」を、一生実践してこられた方だったのです。

お話を伺った後、次郎さんが圧力釜で煮たという小豆とカボチャの入ったすいとんをご馳走になりました。それを食べながらミツさんはにこにこして言います。

「この夫（ひと）、若い時は何にもしてくれなかったけど、今はこんな料理（もの）も作ってくれるし、漬物もつけてくれる。白内障の手術に行くときは、足の爪から手の爪、全部切ってくれたの」

お二人のやさしい時間に交ぜていただき、満州の開拓時代から聞き直さなければ折居次郎・ミツ夫妻の「千三忌前史」は終わらないと思ったことでした。

２００１・１１・１４

「広島で原爆に遭い父親が捜しに来た」と

斎藤政一さん（77歳）

―北上市成田―は語る

上

飯豊の家と藤根の家と

――本名は政一、岳丸（たけまる）っていうのは、わたしの十六歳の時がらのペンネームなの。

いわゆる本籍地は飯豊の「エビヤ」。中村、宇南部落。うだがらねぇ。「エビヤ」っていう地がありまして・・・。うーん。そごの、まあ、いわゆる戸主が朝吉というんだけど、子どもがなくて、要するに、わだしの父が弟家督ということで、末っ子（はっち）だったがら兄貴の相続人。そごに横川目（和賀町）から母が嫁いで来たということで・・・。

昭二？知ってる？わだしのすぐの弟です。

高等科、終わるまで飯豊に居だがら同級生は飯豊の人だぢ。成田だとホラ、伊藤瀧男君どがサ。白畑R郎だどがね。伊藤Iどが、あの人だぢが同級生。そうです。ホラ、女性ではキエさんだどが長子さんだどが、いろんな人だぢがいましたよ。

――家は農業。村では五番ぐらいに入っていたでしょうねぇ。昔は規模の大きい農家だったけれども、火事になったり、高い馬、すごくいい馬を飼って儲けようと思った親父が乗り回して、馬が足折ったごどによって使い物にならねぇ。それで、ものすごく大きな打撃で田んぼを手放したりして、だんだん小さくなってきたわげだ。

それでまあ、兄貴と一緒に田んぼやってだってしゃねえっていうごどで、親父は花巻の製材所ね。そごでずっと働いて工場長までやった。まず、ほとんど百姓しないで一種のサラリーマン。

そやね。昭二が生まれだ時、昭二は昭和二年生まれだがらね。その頃、藤根（和賀町）の駅前さ来て、まあ、製材工場、始めだわげだ。父親は斎藤助次郎だが、いまも製材所になってるけれどもね。

昭二とおふぐろは、こっちに（藤根）来たわげだがら昭二と俺は別れで暮らした。

兄弟は六人か。金三、孝助、京子、睦子、昭子は父親が再婚して生まれた。

―― 飯豊には、父の兄（伯父）夫婦とお祖母さんがいでね。わだしが子ども替りに居だ。でも実際には父母はこっちにいるわげだがら、土曜日になるとこっちへ遊びに来て、土、日とこっちに居で、月曜日の朝早く飯豊まで歩いて行ったわげ。お金の欲しい時もこっちに来る。藤根といっても、下江釣子で弟や妹はみな江釣子の小学校に入ったんですよ。

弟たちの子守り

―― 黒工（黒沢尻工業高校）の試験に受がったけども、おふぐろがずっと入院でね。その年は入学断念せざるを得ながった。

おふぐろは、見返り美人と言われるぐらいだったが、しょっちゅう、病気すてね。仙台の病院さ行ったりすてれサ。入院すると、ホラ、いまど違って子ども連れでがれねぇ。

うだがら、結局、わだしがお守りすねねくてサ。おしめ洗って、裁縫、掃除、出産は出来ないけれど、後は全部、やらなきゃならなかった。 助の子守り。

助って分がる？藤根の駅前に居で五、六年前に亡ぐなった。中学校までは飯豊だった。盛岡の高校に入ったけどもね。

おふぐろ、死んじゃったわげサ。昭和十五年、三十三歳で亡ぐなった。五人の子ども残してね。それごそ子供たぢは、ハナだらけ（鼻汁）のドンブク（綿入れ半てん）着てサ。

親父は四十歳ぐらいだったナ。ほんとうに辛かっただろうなど、自分もその年になるどね、思いました。

親父は再婚しました。わだしはホレ、学校さ入りだいしね。一年間、まず、おさんどやったけどもサ。どうしても学校入りだいしねぇ。隠れで泣いでるわけだ。親父も気の毒になったんだね。それで世話してくれる人があって・・・。花巻の大沢の人。子どもが一人生まれで、そごに（藤根）いる[illegible]子というのがそうだ。それでわだしもようやく、家事から解放されで、まだね。試験受けで入った。

第一線に出してくれ

――高校に入っても戦争中だがらね。まあ、ふつうは三年なんだけれども、二年半。十二月の卒業式だった。

それでホラ、陸軍のね。航空技術研究所に就職ということになってね。立川にあって、先端の研究所だがら、全部調べられで、試験もして入った。

ボクは黒工の〇科出身だが、一番だったがら・・・。おかげで、飯豊小学校から優等生。（笑）。軍隊に行っても士官学校一番でね。まずサ。昔話だがらサ。（笑）そういう賞状がある。通信簿もある。

研究所に約二年か・・・。飛行機の研究所だが、わだしは、まあ、〇科出身だがらね。無線操縦だとかの研究。いまがら六十年近くも前の話だがらね。電波警戒機の研究もやっておって、もっとも先端の研究です。

そごに長ぐ居ろって言うごどだったけどもサ。あの頃だがらサ。戦争に征がない者は・・・。と、勇み立って行ぎだいのね。男どして・・・。

第一線に出してくれど、抑えられだったけれども軍隊に入隊したわげだ。志願入隊したわげだ。満だと十八歳ぐらいの時か・・・。

全部、試験です。試験で取れなければね。なんぼ大学終わってもね。ただの兵隊の人もあるし・・・。試験で取れれば、いわゆる下士官にもなる。将校にもなるド。下士官と将校はぜんぜん違いますからね。

一番最初にわだしはね。大阪にちょっと居でか・・・。それがら満州とソ連の国境の満州里、アルシャンという

所に行ったんですよ。ホロンパイル高原のあの辺りに行ってね。

そごは、九州の大きい部隊が居だが、南方に転進して、いわゆる、空っぽなわげだ。そごにね。こちらの方の兵隊を集めで部隊を編成した。岩手出身の人も何人かいました。

満州里に約半年いだがね・・・。幹部候補生に合格して、こちらの内地の士官学校に入った。

相模原の通信学校。そこでいわゆる見習士官になるんですよ。とにかく、医者であろうが、東大卒の弁護士の資格を持っていようが、二等兵になりますからね。軍隊に入って、半年間は、徹底的に鍛えで、鍛えで、鍛えられるわげだ。徹底的にやられる。全部、一緒にやるわげ。皆、同じごどを覚えるわげですよ。

それに合格して、星が二つになって一等兵になる。一等兵になったっていうごどは、それごそ、何でも出来る兵隊っていうごどなんですよ。そごがら、上等兵になり兵長になり、幹部になって兵隊を指揮したり、いろんな事が出来るが、一等兵から上等兵になるのに一年かがる。

でも、あの・・・。幹部候補生の資格に合格すると、だいたい、二カ月ぐらいずつに位が上がってゆくわげサ。どんどん上がって、一年経つと、もう、だいたい将校までえぐわげよね。

そのかわり訓練が厳しいですよ。ずっと前からいだ幹部と位が同じであれば、同じ事が出来るという、まずね。事なんだがら・・・。

五年、十年、十三年、軍隊で飯を食った人だぢと、ホラ、位が同じなれば同じ事。出来なきゃねえはずだしね。だがら、もう、なんてかナ。自分で自分をね。磨かなきゃならないし、もう、夜も寝ないで勉強するわげだ。

ありとあらゆる学科、飛んだり跳ねだり、様々、軍隊の技術、作戦計画、全部、出来なきゃならない。

おかげさまで、まずね。少尉になった。

前にホレ、陸軍の航空技術研究所にいで実績が買われだもんですから、まあ、士官学校に入っても成績がええっていうごどで、まずね。（笑）特別扱いだったがら・・・。

そえで、全軍のねえ、満州、支那、朝鮮、台湾、フィリピンに行ってる兵隊だぢの間を歩いてね。飛行機の探

知する機械の操作を教えで歩いた。新しい機械を買えば、ホラ、何も分からない人に、いきなり、ここにこうしてと言っても無理なわげ。いまなら、女性でも男性でも自動車学校に入ったと同じだ。

まったく知らない人だぢ。農家で田起こししたりしていだ兵隊だぢに教えなきゃならない。

あなたは二カ月以内に この世から見えなくなる

――ずっと方々周ってね。翌年の四月に広島に来た。通信隊の教育に行げっと言うごどで、昭和二十年四月に広島に来た。比治山にね。日清戦争（１８９４年～明治27年７月に勃発。朝鮮の支配をめぐって、日本と清国～中国の間で行われた戦争）。日露戦争（１９０４年～明治37年２月に勃発。韓国、満州の支配をめぐるロシアとの戦争）の時の大本営でね。日清・日露戦争で亡ぐなった兵隊のお墓がいまもあるんですよ。

方々に空襲はあったが、幸い広島には落ぢながったド。つまりね。東京や方々に空襲はあったが広島にはながったト。

結構、外人が居だがらね。宣教師だどが、大学教授どか外人が居るがら、こごには多分、落とさねぇだねかという話もあったわげだ。

それで、わだしが来て、丁度、二カ月目に、あの・・・。ドン、ドン、ドン、兵隊が南方に行ぐようになってね。広島は港から、軍隊が出ていった所なんですよ。たとえば、青森だとが仙台から来てね。広島がら船で行ぐわげだ。

兵隊が来ては出て行く。来てはまだ出て行ぐわげだ。それで、外泊したいという兵隊だぢがあるとね。全部、将校がハンコ突いでやらねあねぇ。

そのハンコ、僕が注文に行ったらね。一軒の店を三つに仕切って、片方がハンコや。片方が射的屋。キャラメルとかタバコを並べて、玩具の鉄砲で撃って当たるとくれるんですよね。

なかなか当たらない。ハンコ頼んでいる間に、それをやった。当時はキャラメルなどないですよ。幸い、バン

バン当たって、こりゃ良なっていうごどでいだら、きれいな女性が居で、占い屋。ハンコ屋、射的屋、占い屋と、つぎつぎ梯子して歩いた。

「どうですかね」と言ったらばね。手を見て、じっと顔を見てね。

「あなたは、向こう二カ月以内に、この世から見えなくなります」ト、言うんですよ。

「なに！」

「この世からみえなくなりますよ」

「おばちゃん、何言うのや。俺、兵隊だゾ。見えなくなるなんて変な事言わないでよ。あなた死にますよ。と、覚悟しなさいと、なぜ、はっきり言ってくれないのか」と言ったら、

「いや、あなたはね。命ありますね」

「なに、なに、なに。この世から見えなぐなるって？命があるって？何言ってんだよ」とね。

「冗談言うなよ。じゃ、俺、潜水艦のような艦が沈んで、ずっと苦しんで、ずっと回ってるのが。一人、死ねないで、ただもがいでる。哀れな姿なのが」

「それは分かりません。ただ、あなたは命ありますよ」と言う。うーん。おかしいト。この世から見えなぐなって、命はあるト。

そういう話サ。事実、その通りになったんだけどね。

占いの女性は四十二、三歳。こっちは、ガキですよ。（笑）

「俺、お金払わねぇよ」って言ったけども、それもあれだから、払ったたけども不思議なこどもある。どうせ、冗談だと思ったわげだ。

――そしたら、家がらの手紙でエビヤ（生家）のお祖母さんが、「マサ（政一）が、全身包帯で雪ダルマのような姿になっている。と言ってる。」ど、書いで寄こしたんだよ。

その時、病気で寝でらたお祖母さんがね。そう言ってるト。お祖母さん、九十歳ぐらいだった。

あれッ！「どっちもね。同じような事言う。占い師はこの世の中から見えなぐなるどが、お祖母さんは全身包帯で雪だるまの姿だどが。

お祖母さんは利世という名で、小さい時は恥ずかしい

と思った。華岡青洲（１７６０～１８３５、華岡流外科の祖）の妻は、利世というんですよ。

家の利世お祖母さんがわだしに言ったごとはね。九歳でこの「エビヤ」に嫁に来たト。

万助（夫）は、刀をさして羽織、袴で婿入りに来たり行ったりした。その刀がこれだと、ちゃんとあったんですよ。その利世お祖母さんが、そう言ってるト。占いが言った六十日以内にとは、八月六日ですよ。

八月六日、午前中は就寝許可

――七月の二十五、六日ぐらいまでは毎晩、空襲警報だけどね。飛行機は飛んで来るが爆弾は落とさながったわげですよ。

それで、外人もいっぱい居るし、奴らね。スパイなんだト。あいづら居なぐなったら落とすかもしれないゾ！てサ。言ってたわげだ。

そしたら、七月二十五日なったら、ひたっと、ぜんぜん来なぐなったんですよ。色々情報取ったらね。いわゆる、ケニアン島どがね。南方の飛行機の発進地が、台風で、すごい大嵐、大荒れで飛行機もかなり損害があるそうだト。あるらしいト。しばらく来ないのはそのためだろうと思っていたわげだ。

ところが、八月五日の夜から来だして・・・。

来ては帰り、来ては帰り。

八月五日、二一時二〇分に来て、二一時二七分に来て、八月六日、零時二五分に来た。その都度、「空襲警報！」ってなるがらね。皆、防空壕に入ったり。おちおちしていられねぇ。いま落ちて死ぬがと考えでるわげだ。

翌朝、七時まで何回も来てはくり返すがらね。皆、ホラ、この間、ぜんぜん寝られねぇ。

全市がね。広島の街の中、四十一万人いだけども、一人も寝でねぇわげだ。この時にね。

――明け方、兵隊たちが起床時間の七時に飯を食おうと思った時、まあ、ともかく飯を食わないど体がまいっちゃうだろう、というごどで飯を食った。

そして、うーん。夕夜、ぜんぜん寝ないがら午前中は就寝許可だト。寝ろト。ところが兵隊はなかなか寝られねぇ。わだしが週番士官だったがら、「寝ろ、寝ろ」っ

て歩いたわげだ。

一個中隊っていうのは、平時は百人なんですけど、戦争中のため、四百人いだんですよ。その連中に、「皆、寝ろ、寝ろ」って言って部屋に帰ったのは、丁度、八時頃だね。兵隊はしゃるびり（無理矢理）寝せづげで将校室にもどった。

空襲警報がないのに、ウワーンと音がするわげだ。普通なら、もう、この辺だと、青森の辺りに来ると空襲警報どなるわげだが、ぜんぜんない。そえで、こう窓がら見だらば、確かに三機のB29が飛んでるわげだよ。おかしい、おかしいなト。うーん。何か原因があるかもしれねぇト。

いつも三機来た時はね。その・・・。「皆さん戦争が嫌になったでしょう」と、「ほかの都市は平和に暮らしてますよ」ト。「早く戦争をやめましょう」なんてサ。ビラを撒いでゆぐわげサ。多分、ビラじゃないがと思ったわげ。

むがしの十円札ね。表がすっかりきれいな十円札なんですよ。裏がそういう文句ね。

ザーツと撒いでゆぐ。ちょっと目の悪いおばあさんだぢだと、分がらない。十円札だと思って受げ取ってお釣りを出してやったなんて、ずいぶんあったんだけどね。経済のかく乱ですよね。で、ビラじゃないがと思った。

確かに、こう、降りで来るのが見えた。

丁度、中隊長が入って来てね。これが、新婚一週間目の中隊長でサ。東洋大学か？、明治大学か？の出身でね。医者の家に生まれでサ。勉強が嫌いで医者になるのもいやで、八年だが大学に入ったどがって、男前の中隊長だったんだよ。

「やや、俺のカガはナ、田中絹代に似てね。右から見ても左から見てもきれいな、田中絹代にそっくりだゾ」なんてサ。（笑）言ってきたんだよ。もう、こっちは飛行機も気になるが中隊長だべ。

「あっ、そうでありますか」ってサ。中隊長となればかなりの差あるんだがら緊張すてるわげだ。

「勤務中、異状ありません！」なんてサ。

したえば、（そしたら）「パッ、カツ！」と堅い物が割れる音がしたんだよ。

窓際に立っていだがら、ひょいと表を見だ。

バーッときてね。一歩しりぞいだ。ダーッとね、一瞬

にして真っ暗になった。
瓦がワーッと降ってきた。あっと思ったら青空が見える。建物が全部バラバラ落ちてきた。四百人の兵隊が皆、落ちてきた。外は真っ暗。
一平方メートル当り、五〇トンという爆風。鉄でも何でも曲げちゃう。火の見櫓も、あっという間に曲げちゃう。すごい力なわげ。
爆心地から一・八キロの地点です。
その時は直撃弾受げだど思ったわげ。たった一個、俺の居る建物にだけ直撃弾受げだど思ったのサ。とにかぐ、真っ暗な中、手さぐりで行ごうとしたらね。柱に当たったわげ。柱にすり寄った。真っ暗だがらね。その柱が、ギューッと捩った。肋骨(あばらぼね)メリメリッと折れでね。
後から見たれば五本折れでらた。顔、頭、背中、ベロベロど焼げただれでサ・・・いやぁーッ。六千度の高熱にやられるんだがらね。
ワーッとさ。ちょっと、真っ赤な物つかんでも熱いでしょ。そしてすぐ火ぶくれになる。それが、一メートル五〇トンの爆風がきたもんだがら、皮膚がむげで、ふっ飛ぶわげサ。着てる物も全部飛ぶ。女性でも何でも全部、真っ裸ですよ。
体中、焼けただれで火ぶくれ。皮のむけだ兎のようになったわげだ。一瞬にして。
二階にね。七〇センチぐらいの梁がいっぱい入っている。その梁がボックリ折れで隊長のね。上に落ぢで隊長は潰れて死んでさんた。
わだしは、建物の死角あるわげだが、それで助かった。
梁がやっぱり頭にきて、頭が割れで顔中、ダラダラと血が流れる。頭のここの、ホラ、いまも傷跡がある。

四百人の兵隊のうち 残ったのは三十八人

――週番士官っていうのは、中隊全部のね。全責任を一週間交代で負うごどになってるんですよ。週番上等兵、週番下士官どね。週番士官だったがら、それでまず、「兵隊集まれ！」ど号令掛げだわげだ。
集まったのは四百人の中で、たった三十八人だけ。それも、びっこ引いだりなんかしてサ。あどはホレ、重なり合って、骨折って、あちこちで「助けでくれ」ド。

窓に足向げで寝でだのだがら・・・。
建物の真ん中に廊下があってね。両側にベッド置いで窓に足向けで寝でる。夏だから、体の上にだげ毛布かぶって・・・。
光が、そちらの窓がらも、こちらの窓がらも入った。足がベロリど焼けでる。建物の外では重なって窒息死した者が多い。
いまもアメリカではね。この時に広島で亡ぐなったのは、七万八千人だト。全部で十四万人だト。その後の五十六年間も含めでね。
とごろが、現実にはあの時死んだのが、

軍人が六、〇八二人
乳幼児、赤子が五、五四七人
九歳から下の子が五〇、八二〇人
十九歳から下の子が九五、二八九人
大人が一〇七、二六五人
約二六五、〇〇〇人
このうち軍人は三・三パーセント
あとは非戦闘員が九六・七パーセント

いわゆる民間人が死んだ。しかもこれが、三倍の六十万人の被害になっている。後から、救出作業に入った人も被害を受げでる。原爆っていうのはひどい。
広島の街は火の海でね、川という川はぜんぜん隙間がないぐらい人が入ってね。即死。死んでるわけですよ。川といわず、道路といわずサ。約四十万の人間がのたうちまわっているわげですから、タライの中に入れたドジョウみだいにうごめいて、苦しんで、死んでるわげだ。
――四百人の兵隊のうぢ、三十八人しか残らない。それも、助けてくれどがサ。苦しいど言ってる。行って、なんぼでも助けでやれって命令を出した。
わだしは、全身、焼けただれでるし、肋骨は折れでるし、しかも足が切れでね。
長靴を履いでる。いわゆる通信隊の将校ってのは馬に乗って指揮して歩くためにね。乗馬用の長靴履いでいるんですよ。それから血があふれ出してきたの知らないでサ。ああしろ、こうしろって言ってだわげだ。
「隊長殿、足に血が流れでおります！」って言うので、

何だと思ったら血がドンドンあふれでる。

「おやすみください！」「腰掛けてください！」どがサ。騒ぐけれども、そんな事、すていられねぇ。

まず、「助けろ！」「助けろ！」と怒鳴ってサ。そのうぢに俺自身参っちゃった。

飯も食ってねぇ。午後二時ぐりぇになったら、ヘタヘタと気失ってしまった。

気がついたらね。防空壕みだいな中に置がれでらた。やっぱり動げなぐなった兵隊が三、四人俺の周りに居だった。

すたらね。バチバチど音すると思ったら、火がワーッと押し寄せてきた。眉毛がら何がらチリチリと焦げるまで巻がれでしまったわげだ。

兵隊に、「オイ、一緒に、こうなりゃ、もう逃げられないがら一緒に死のう」と。

「覚悟しろよ！」

「ハイッ！」ってサ。皆、傷付いでいるしサ。

そしたえば、スーッと火が・・・。風向き変わってサ。火がなぐなった。

あの時、焼げないで・・・。まあ、生ぎだ一つの原因なんだけどもね。

死んだ人間扱い

――夕方までに、赤十字病院とが、陸軍病院どがに兵隊をやったけどサ。街の中のすごい火に巻がれで、ぜんぜん動かれないド。街の中には、入れさせでくれないし、入られない。道路という道路は全部人で歩げないで帰ってきましたト。しかもそれが黒い雨に降られでサ。みんな真っ黒。ビッコ引ぎながらサ。

仕方がねぇなぁって言ってら・・・。

とごろが、夕方救助隊が他がら来た。遠ぐの街の人だぢがね。こごでいえば、盛岡どが仙台がらね。急遽来たわげだ。

あどは俺たちがやるがら、小学校の野戦病院に行けというごどになった。

「動げる者は集まれ！」と言って集めだれば、十八、九人。それらを連れで行った。

野戦病院は仁保の小学校だったけれども、そこまで歩いた。途中で死ぬ者もあってね。

皆、血を流しながら、ろくな包帯もないし薬もない。朝から食ってないし、死んでゆぐ。

だがらどいって、どうしようもない。こっちも兵隊を背負って行げるような状態でもないしね。まだ、誰かに頼むがらってサ。行かざるを得ない。

普通なら約一時間で行ぐんだけどもね。十時過ぎに着いだわげサ。這うようにしてしか行げねぇんだもの。

もう、校庭がら、校舎の中がら満杯でサ。

仁保の小学校は中心部から六キロ以上離れであるんだけれども、机がみな飛ばされで窓の方に積み重なってる。

兵隊やら、一般の人だぢやらね。全部居で　入る所がないわげサ。ようやぐ、便所の軒下がなんぼが空いているので、そごにまず、兵隊入れでサ、ここで我慢しろト。

そのうぢに、「なになに通信隊の誰それがここにいるゾ！」と叫んでも誰も来ない。

わーん、わーんの中だがらね。うで、その夜は、ぜんぜん、治療もなく飯もないわげよ。

昼、夜食もなくうん、うんと唸りながら夜明けを迎えた。

誰か来るだろうど思ったけどサ。ぜんぜん来ないわげ。

うーん。これじゃ、生きる者も死ぬ。ダメだど思って、わだしがまず、刀を杖に血のあふれでる靴そのままで・・・。頭が真っ赤かで見られねぇ。それでも階級だげはまだあるがらね、

何が言えば、「ハイ」「隊長殿」だから、隊員の奴ら道開いだりしてサ。まだ這うようにして、元の隊まで行ったら何とがなるど思って行ったんですよ。そしたら、もう、まったく隊は全滅状態。救助隊の人だぢがテント張っていだがらね。

「この隊の誰々であるが、仁保小学校に避難しているがら、食料と医療をぜひ確保してもらいたい」

「ハイ、わかりました」ってサ。まだ元の所に帰る途中で倒れでしまった。

おそらぐ、二日ぐらいそごに置がれだと思います。で、目覚ましたの。「熱い」変な音がするなド。学校の校庭だった。連れでがれだんだね。

校庭にね。縦横二メートルぐらいの穴掘って、そごで、ドンドンドンドン人焼いでサ、骨落としてるわげサ。

ドンドン火が燃えでるすぐ傍に俺が置がれでるわげ。もう少しでね。焼がれるとごろにいってらたわげ・・・。

俺も死んだ人間だと思って、死んだ人間扱いになってるわげだ。

体中、真っ赤だしね。もう、ウジがわいでる。

そうなりますよ。ミミズのようなウジがね。動いてサ。チッ、チッと吸うんですよ。焼げただれでるがら痛いんですよ。血を吸うってのはね。ヒルにやられだごどないでしょ。ヒルね。生血、吸うんですよ。

体のウジ、それを取るのにずいぶん苦労したって看護した人たち、いまも話すね。

そういう中にいで、俺も死体になっていだ。

「ああーッ」と、声上げだものだがら、「生ぎでるゾ！」っていうごどになってサ、バックさせられだわげだ。

父親来る

――丁度、そごにね。わだしの父がね。訪ねて来た。お祖母さんがその・・・。「なんだが夢見悪い」ト。前々からマサは雪ダルマみだいになっているって言ってたけども、

「なんだが、おがすねぇ音した」ト。

「とっても心配だがら、どうせハ、俺も年取って死ぬどごだがら、まず行ってみろ」って、言われだってね。親父が来た。いわゆる霊感っていうやずなんだね。

七日あだりに発って、三日間かがって来たのだがら、十日頃に来たわげだ。わだしが焼がれる所さね。ほんとうに、奇跡というか・・・。

うだがら、家の親父ね。被爆者なの。親子二代の被爆者っていうごどになる。肝臓がねぇ。中ぐらいの南瓜の大きさになって死んだ。普通の人の肝臓は、その人の握りこぶしぐらいですよね。三倍なんだを・・・。

広島に来た時の親父？四十六ぐらいがな。

来る時に、もう広島はね。草木も七十五年以上は生えないだろう。と聞いで来たト。とにかぐ、広島にはね。まったく、何もないだろうが、「石拾ってこい」ど言われで来たと、いう事だった。それでも来たがぎりはねぇ。せめで、どごで死んだがぐりぇは知りたい。さんざん、広島の街中を歩き回って・・・。

その間にホラ、建物の下になって、「痛いよう。苦しいよう」と叫んでるので一生懸命になって、助けでやっ

た。とにかぐ、たくさんの人助けで、ようやぐのごどで、わだしを探し当てたのが焼がれる寸前だった。

あの時、親父が来なければ、おそらぐわだしはあそごで死んでるね。

なんだが、いわゆる一種のホラ、霊感、科学者どがサ。普通の人だぢはね。そんなごどはあり得ないド。まあ、言う人だぢもあるけどね。いろんなことを総合して、わだしは霊感っていうのがな、あると思ってるわげ・・・。

親父は、わだしを見で、うーん。こりゃ、助からねぇと思ったらしいね。家へ帰ってきて、おそらぐ助からねぇがら、遺骨来るべがら葬式の仕度すねぇねなあ（しなくちゃならないなあ）って言ってらたそうだ。

先頃まであったんですよ。俺の替わりの石が・・・。（笑）

生きてる人間つので別の所に収容されだんですよ。重症患者っていうごどで、トラックに乗せられで運ばれだ。そこでようやく、薬を塗られだりサ。包帯してもらったりして治療が始まったわげですよ。まあ、ようやぐ生きた人間としてのね。

終戦放送と同時に半分は死んだ

――戦場に立でば怪我もするし、弾も当たる。死ぬけぇすてらのだ。（死ぬつもりでいたのだ。）まったく、ぜんぜん、何の不思議も疑いもなぐね。俺も死ねば、いずれ、あそごで焼がれるだなト。焼がれるだけ、まず、幸せだなト。そんな軽い気持なんですよ。そうですよ。たいした違和感もなぐ。エスカレーターに乗ったようにサ。死ぬんだなぁと、そう思っているんですよ。

ホラ、戦争のために亡ぐなるのだがら、戦争は、何とか勝ってくれればど思ってる。

だから、負げだト。すごいショックでサ。どうせね。俺も死ぬつもりだし、こんな体になったしね。体中、傷だし生ぎでらたってしょうがないど思ってね。

正直言えば、刀持って、あの・・・。ムチャクチャにサ。気持の整理の仕様がなくて、刀振り回して太い竹切った。やりきれなくって・・・。

その時、多分、あそごに約千人近ぐの患者が居たけどね。半分は死んだんですよ。八月十五日の終戦放送と同

時に。

終戦の放送というのはね。天皇陛下の玉音放送があるというごだったんだけど、ガーガーって聞こえた人だぢ誰もながったけどね。

とにかくやっぱり、「堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ」っていうもので、「堪へ難キヲ堪へ」、さらに戦争しろって言うのか、これでもう止めるのか、皆、ほとんど分がらながったんだけど・・・。やっぱり、それどなぐ分がって、「もう、戦争負げだんだどサ」「止めだんだどサ」って、以心伝心で伝わった。

そしたらね。ガクッときて半分以上は死にました。大変なもんですよ。だって、ホラ、男女共に普通の主婦であろうが、誰であろうが、「勝つまでは」って、食うのも食わねぇで、がんばってきたのが負げだどなったらね。

もう、ほんとうに半分以上の人が死んだり気違いになったね。発狂してしまった。

つぎからつぎと、誰々死んだ誰死亡ってね。紙に書いだのサ。そう、紙に名前を書いで置いでぐわげだ。

——こんだあ、（今度は）そのうぢに米軍がね、上陸して来るゾという話が出てきた。

とにかく将校以上は全部殺されるだろうト。

だがら、その前にその・・・。死んだ方がええだろうというんで、丁度、キャラメルぐらいのね。青酸カリをね。二個ずつ、その・・・。寝でる枕元に、将校の所に置いでいぐわげだ。

まずね。自分で腹切って死ねない者はこれを飲めって、枕元さ置いでったわけ。

そういう意味で、わだしも常に寝床の下に刀を入れで置いで離せないもんですからね。

武士の魂っていうがね、

「俺だぢも、これで腹切って死んで見せるがら心配しないでくれ」って言ったけどサ。

青酸カリ飲んで死んだ人、いながったね。ほんとうに死ぬなら武士の魂で・・・。腹切って死ぬ。ノド突いで死ぬ。

そういう人？たくさんいます。います。いま喋るど、とっても惨めなもんだがらね。わだし自身も死のうど思ったりした事もあるがら、とても辛いです。

――戦場に立てば砲弾受げで死ぬっていうのは、あだりめぇだったが放射能のね。それは分がらながった。

というごどで、一刻も早く広島から立ち去れト。広島の街に居るというごどは、放射能があるがら、危ないト。

それごそ、こごなら、仙台とか盛岡からね。広島に救護に来た人だぢ、その日夕方がら、ワーッと熱が出て38度、39度の熱が出て、一生懸命稼げる人だぢが俺だぢよりむしろ役に立だない。

見舞いに来た人が、逆に怪我している息子に頭冷やしてもらってる。

こちらは、もうハ、馴れでるがらボーッとしながらも、なんとが、かんとがねぇ。まあ、動いたんだけれども丈夫で来た人だぢごそ、皆、動げなぐなって寝でるわげだよ。

まったく、すべての細胞が破壊されで草木の生存条件がないというごどが分がった。

しかも、いわゆる、ふっ飛んだ電線だどか石だどか、その辺の壊れだ建物の鉄筋だとかが放射能を持ってるト。その傍を通るどね。その人間の骨に食い込むから、石とか鉄の傍通るなど、なってきたわげだ。

いままでの焼夷弾どがそういう物どはぜんぜん違うなってうごど。まずね。だんだん分がってきたわげ。

それで、広島の街がら一刻も早ぐ遠ざがれっていうごどだった。早ぐ広島を離れだ人だぢは症状が軽いわげ・・・。

――骨折した連中動げねぇわげ。その連中を担架を作って乗せで。東京都内の患者と兵隊は五人がナ。全部で二十人。

「斎藤隊長、送り届けて帰れ！」っていう命令でサ、帰った。

ビッコ引いだりお互いまどもな奴いねぇのだがら、百鬼夜行ですよ。（笑）とにかぐ、助け合わねぇば動げねぇ。

茨城県だどが栃木県だどがサ。仙台の人間どが。指揮して東京都内にね。来た。

渋谷から品川の海が見えるんだもの。まったぐの焼け野原ですからね。でも、電車だけは通っていたがらサ。

空襲で、ホラ、身寄りのない者もいる。そういう者は病院に頼んでね。

いたる所に、アメリカ兵が居でね。持ってる物なんか、みな、見でるんだよね。

軍刀、隠してくるの、ほんとうに大変なごどで。仙台に帰る担架人間、一人あったたがら彼の下さ、軍刀置いで、知らん振りして持ってきた。

やっぱり、その・・・。いまになると、あれだが、当時としてはホラ、軍刀どがね。それが主体というが、俺だというつもりだがらね。

ほんとうに愛着があって、これが、俺なんだト。

仮病だと言われる

――しばらぐの間、昭和三十五年ぐらいまでね。毎年、盆過ぎになるとね。体がしびれで動げなぐなるわげよ。

この通り、顔は真っ赤で酒は飲むし、大っきな声で喋る。あの・・・。なんだ。昔の青年議会で演説して歩いたこともある。

仮病だって親父がらも、それこれそ弟がらもグヂ言われる。（笑）ホラ、しびれるのは本人しか分がらない。外がら見でも分がらないがらね。

それごそ、全国のね。有名な大学の先生訪ねでサ。診断してもらった。「どこも悪くない」と言うんですよ。でも、しびれる。時折四十度ぐらいの熱が出るわげですよ。

いわゆる、原爆症ってやつでね。当時のホラ、医学ではそれを見通したり、治療するごどが分がらねぇわげだ。

東京に行ぐど忘れで動げる。とごろが、こっちにいるどハ、午後になるどしびれてくる。

季候差っていうので・・・。

東京なら、午後の四時でも五時でも用事で歩いでる。おがしいなト。こっちに来ると、しびれで動けないしね。

「とっても、俺ごごにはいられねぇ」っていうごどで、遮二無二東京へ行ったけども、親父はもちろん反対。いわゆる、長男がね。家を出るなんてごどは、あっちゃならないごどで・・・。むがしはねぇ。

「親を捨てで、いい若者が都会に駆け落ちした」ト。ものすごっく、評判が悪くてね。

むがしのわだしを知ってる人だぢ、この辺りに（藤根に）いっぱい居るわげだがらね。（笑）

いまでも「逃げだったずもなス」って、言う人だぢが

いるんだよ。（笑）

（以下次号）

〈二〇〇一年九月十四日／
記録／小原麗子〉

※ 参考 広島に落とされた原子爆弾は、「ちび（リトル・ボーイ）」で、長さ3メートル。1945年5月／アメリカのトルーマン大統領は、原爆問題特別委員会で次の結論を出した。①原爆はすみやかに日本に使用。②他の建物に囲まれている目標に対して使用。③事前通告なしに使用。

投下する都市の基準として、

㋐日本の戦意をうちくだく所。

㋑軍事目標の破壊。

㋒実験効果をはかるため空襲をあまり受けていない所。小倉（福岡県）、広島、新潟、京都、とした。（『朝日ジュニアブック・日本の歴史』より）

ピーマン

あとがき

アフガンの聖母を撃つな千三尼

小原麗子

■五月末、沖縄は梅雨に入っていました。初めて訪れる沖縄です。松林や松林は見当りません。ヤシの並木が続きます。ガッチリした現代建築にあっても、シーサー（獅子の魔除け）が睨みを利かしていました。

『レンタカー屋さんが作った、沖縄情報マップ』は、まず、観光地が紹介されています。沖縄戦の跡は沈んでいるかのようです。が、そこを主体に考えるか否かは、本人次第ということかもしれません。

その時、母は病んでいました。持病の腹病です。戦地から一時帰国した重忠（しげただ）おじは、母の枕元に桃の缶詰を置いていってくれました。

「熱で／ドがかわいている時によ……」

その缶詰がとれたけおいしかったか、重忠おじいさんは思い遣りがあって……と、それが母の語り草でした。

わたしたちは、齢も離れているせいもあり、「おじさん」と呼んでいましたが、従兄です。わたしの父の姉に婿を取り、一緒に住んでいました。母が嫁いで来た時は、十六人家族だったといいます。

重忠おじは七人兄弟の末子、母はなにかと、世話をしたのでしょう。

重忠おじは、沖縄戦で戦死しました。いまは分家になった仏間の鴨居に、凛とした表情の写真が飾らています。

戦後、重忠おじには恋人がおったそうだと聞きました。その人が、わたしの勤めていた農協の窓口にやって来ました。不気嫌な表情です。姉につらく当たるそうだと、同僚が言います。それでも、その不気嫌を思い遣らずにはいられませんでした。

母の桃の缶詰の話から、五十六年以上たちました。あの恋人だという人を見た時から、四十三年になるでしょうか。

わたしは沖縄に、重忠おじを捜しに来たのです。ほんとうに、ここにいるのだろうかと……。

そこは、広大な公園です。黒い石の波です。石の波は「一六基、刻銘板は一、二〇四面です。捜し当てることができるでしょうか。

「平和の礎（いしじ）」に刻まれた刻名数は

沖縄県　一四八、二八九人
県外　七五、二十九〃
米国　一四、〇〇六〃
英国　八二〃
台湾　二八〃
朝鮮民主主義人民共和国　八二〃
大韓民国　二六三〃
合計　二三七、九六九人

（2006年6月23日現在）

第二次世界大戦で、沖縄は国内唯一、住民を巻き込んだ地上戦となりました。

「平和の礎」には、その戦没者名が刻まれてあるのです。敵国の戦死者名も刻まれています。さらに、沖縄県内市町村別の数、都道府県別の数もあり、岩手県は六六七名です。

「鉄の暴風の波濤が、平和の波となって折り返」すことを願う、石の波の間を歩いて行きました。

歩いて、歩いて、おそろ、おそろ、歩いて、歩いて行きます。ところどころに花束がありました。

そして、岩手県の石、「小原重忠」の名にたどり着きました。石にすがって泣く老母の姿の写真がありました。どこからやって来たのか、わたしもその気持です。

重忠おじに会ってきたよと告げたら、亡母は言うたに違いありません。

「やっぱり、れ子、忘れないでいたから呼ばれたんだなあ、ここ」と。

重忠と礎にありて梅雨重し

。

■そしてまた、アメリカは、アフガニスタンを攻める戦争を続けています。誤爆といっては、人を殺しています。どこまでやれば気がすむのでしょう。

アメリカの戦争を支援し、日本からも自衛艦が、（十一月九日、十一月二十五日）出て行きました。

同じ支援でも、わたしは、人を生かす中村哲医師（ペシャワール会、「いのちの基金」福岡市）の呼びかけに答えます。

中村医師は、アフガニスタン、パキスタンで十七年間も医療活動を続け、さらに難民を出さないために、井戸を掘っているとのことです。

二千円で、一家族十人が一カ月生きられると言います。この冬、飢えて死ぬかもしれない人々にパンを配るとのことです。

アフガンのおとこもたちは、澄んだ瞳で、わたしたちを、じっと見詰めています。

アフガンの聖母子繋ぐな千三百

（01・12・13）

中国剪紙

■別冊・おなご・NO 20号

■'01年12月20日発行

■岩手県北上市和賀町長沼5-343-3

■麗ら舎読書会